

奈良女子大学編

① 教育（地方創生を担う人材育成）について

1. 「地域志向科目」について

COC+事業の目的に沿った人材育成のために必要な学修を実施する科目として「地域志向科目」を開講しました。地域志向科目は、社会の未来を切り拓こうとする人材の育成を目指して、地域を知り、地域の課題を発見し、解決策を提案し実践に取り組む科目として開設されています。

2. 「地域志向科目」の実施

平成28年度地域志向科目として開講したのは次の29科目です。

区分	科目名	授業概要	担当教員
教養教育科目	パサージュ 1A	奈良を学ぶ、奈良で学ぶ：本学に進学した理由には色々あると思います。しかし、歴史遺産の宝庫、奈良で学び、女子教育の最高峰、女子高等師範学校の伝統を持つ奈良女で学ぶメリットを最大限に活用する4年間を送ってほしいと考えます。本学の環境を生かした歴史・文学・地理の視点・考え方を体験的に学んでいただきます。奈良女へ進学して良かったと思える授業を目指します。	内田 忠賢
教養教育科目	パサージュ 1B	奈良を学ぶ、奈良で学ぶ：本学に進学した理由には色々あると思います。しかし、歴史遺産の宝庫、奈良で学び、女子教育の最高峰、女子高等師範学校の伝統を持つ奈良女で学ぶメリットを最大限に活用する4年間を送ってほしいと考えます。本学の環境を生かした歴史・文学・地理の視点・考え方を体験的に学んでいただきます。奈良女へ進学して良かったと思える授業を目指します。	内田 忠賢
教養教育科目	パサージュ 20A	下市町へ行こう！：奈良県の中山間地域を見る。本学の共生科学研究センターの協力も得ながら、受講者に、「地域の現状を実感してもらおう」というのが一番のテーマです。社会問題として注目されている地方の維持・再生とも関係した「中山間地域」について、奈良県を事例として、その現状と課題について考えてみたいと思います。みなさんは奈良にキャンパスのある奈良女子大学で学んでいるので、この授業を通して、広い意味での奈良をもっと知って欲しいとも思っています。	高田 将志 吉田 容子
教養教育科目	なら学 (*1)	皆さんが暮らす（通う）土地となった奈良。その奈良について、いろんな角度から紹介し、講じます。この授業は、「奈良」をキーワードにして、奈良女子大学の多様な学びに触れ・知る「入門」となる授業をリレー講義形式でおこないます。	寺岡 伸悟 他
教養教育科目	環太平洋 くろしお 文化論	奈良県は、環太平洋黒潮海廊と古代大和盆地を南北に縦貫する幹線の十字路に位置し、環太平洋黒潮海廊である紀ノ川・吉野川・橿田川ルートは古代日本の産業・文化幹線であった。この授業では、日本の国と文化が生まれた場としての奈良を紀伊半島と不可分の地としてとらえなおし、その地政学的位置、世界とのつながり、国内交通、中心性を帯びる理由、流通・経済・文化・宗教的背景など、多面的視点から考えていく。	小路田 泰直 他

区分	科目名	授業概要	担当教員
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(11)	「奈良の食をさぐる」：近年、地域で生産した食材を地域で消費する「地産地消」運動が、地域活性化とも関連して盛んになりつつある。奈良県においても大和野菜などの農産物を始め様々な食材が生産されているが、知名度はまだ高くない。本科目では、奈良の食プロジェクトの活動を通じ、学生が主体となり、地産地消や地域活性化の取り組みに参画することを通して、奈良の食と地域活性化について理解を深める課題解決型授業を行う。	高村 仁知
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(17)	「奈良の食を知る」：近年、地域で生産した食材を地域で消費する地産地消運動が、地域活性化とも関連して盛んになりつつある。奈良県においても大和野菜などの農産物を始め様々な食材が生産されているが、知名度はまだ高くない。本科目では、奈良の食プロジェクトの活動を通じ、学生が主体となり、地産地消や地域活性化の取り組みに参画する。これにより、奈良の食に関する理解と関心を高めるとともに、地産地消や地域活性化の取り組みを理解する課題解決型授業を行う。	高村 仁知
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(41)	ウォーキングは、比較的軽度の強度で長時間持続出来る運動であり、体内脂肪を燃焼させ、肥満の防止・治療となる。また、高血圧症に対し血圧低下の作用を有する。あるいは、軽度の鬱に対して、抗鬱作用があることが知られている。ウォーキングは、運動靴と軽装の準備のみで行うことができ、比較的日常生活に取り入れやすい運動である。本実習では、実際に奈良女子大学付近を歩きながら、ウォーキングの運動生理学と実際について実習する。これにより、各自の健康のためのウォーキングを体験実習するだけでなく、他の人にウォーキングについて助言可能になる。	三木 健寿
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(42)	ウォーキングは、比較的軽度の強度で長時間持続出来る運動であり、体内脂肪を燃焼させ、肥満の防止・治療となる。また、高血圧症に対し血圧低下の作用を有する。あるいは、軽度の鬱に対して、抗鬱作用があることが知られている。ウォーキングは、運動靴と軽装の準備のみで行うことができ、比較的日常生活に取り入れやすい運動である。本実習では、実際に奈良女子大学付近を歩きながら、ウォーキングの運動生理学と実際について実習する。これにより、各自の健康のためのウォーキングを体験実習するだけでなく、他の人にウォーキングについて助言可能になる。	三木 健寿
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(46)	海外にある交流協定大学からの留学生を主な対象として実施するサマープログラム（7月：英語プログラム、8月：日本語プログラム）において、運営補助および学生交流企画の立案・実行をする。	横山 茂雄 雲島 知恵 松永 光代
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ セミナーB(52) (*2)	この科目はOC+関連科目である。奈良東南部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、暮らしの中の木の活用について学ぶ。奈良の木を用いたモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしの実践を考え提案する。奈良の木を用いたお箸とスツール製作および、奈良県・奈良の木ブランド課が実施する「奈良の木の匠養成塾」に参加する。	室崎 千重 他

区分	科目名	授業概要	担当教員
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナールB(53)	この科目は、COC+関連科目である。奈良東南部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、奈良の木の暮らしの中での活用について学ぶ。奈良の木を用いたモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしで使うモノを考え提案する。奈良十津川村にて1泊2日で行う間伐材伐採体験や地域の暮らしの体験を通じて、林業や地域への理解を深める。奈良の木を用いて、新たな木のある暮らしに繋がる商品、プロジェクトを考え、具体的な提案を行う。	室崎 千重 他
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナールC(4) (*3)	奈良女子大学の学生であれば、実家への帰省の際や就職活動の面接の場などで「奈良ってどんな場所ですか」と質問されるケースが多くあると思います。「鹿がいる町」「お寺や神社が多い町」と無難な回答をするのも悪くないですが、もう少しスマートな回答ができること好印象を残せることでしょう。本講義では、奈良県が誇る「日本一」の産業をリレー講義形式で紹介します。意外と奈良県内にも「日本一」の産業がたくさんある、ということに驚くことでしょう。一般教養として、就職に向けた業界研究の一環として、全学部 of 学生に受講を推奨します。「日本一」の看板を守る業界トップの方のお話しが聞ける絶好のチャンスです。	藤原 素子
文学部 専門教育 科目	なら学概論B	この授業は、奈良に4年間住む(通う)ことになった皆さんに、さらに奈良の魅力や特徴を知ってもらうために、1、奈良県の地域ごとの特徴、様々な文化的特徴、奈良県の歴史の概要、さらに観光など現代の奈良の魅力発掘・発信について解説し、時にゲストも交えて、奈良県について広い知識とイメージをもてるようにする。2、いま各地で地元学など、町や村の魅力発掘発信が盛んに行われている。そうした地域づくりの観点から奈良を事例に考え、そのスキルを実践し学ぶ。	寺岡 伸悟
文学部 専門教育 科目	歴史地理学 概論	地理的事象を主たる研究対象とする地理学にあつて、歴史地理学は空間軸に時間軸を付加して地域・景観へアプローチする。まず、歴史地理学の本質と方法について概説し、ついで、奈良盆地を主たるフィールドとして地割と村落景観および古代都市、特に都城の形態に関して、具体的な事例を通して解説を加える。これらを通じて古代を中心として地表空間の組織化およびその景観的表象の歴史的変遷を明らかにするとともに歴史地理学についての理解を深める。	出田 和久
文学部 専門教育 科目	文化人類学 特殊研究	稲作と農耕儀礼、神事芸能との関係性について、大和盆地の農耕儀礼に焦点をあてて、地域的特性と歴史的な展開過程を解明します。後期開講の授業では、秋祭りから寺院の修正会・修二会等の年初の除災行事と春先の農業の予祝儀礼である御田植祭をとりあげます。	武藤 康弘
文学部 専門教育 科目	なら学 フィールドワーク 実習	一般の方に、奈良の地域文化資源や魅力を伝える(冊子等の)コンテンツの作成を「想定」しながら、文献資料検索などで基礎的知識や観点を獲得し、そこで得た視点で、実際に奈良をフィールドワークし、学外のコンテンツ作成の専門家と共同で、統一した枠組みのなかで奈良の情報や魅力を表現する成果物の制作の過程を学ぶ。	寺岡 伸悟

区分	科目名	授業概要	担当教員
文学部 専門教育 科目	歴史学実習	フィールドワーク調査を実際に行うなかで、歴史的感性を養い、過去を復元する能力の習得をめざす。2泊3日程度のフィールドワークも実施し、調査報告書を作成する。 なお、受講予定者は、前期に実施する「歴史学実習予備調査」の情報に注意しておくこと。	西谷地 晴美 他
文学部 専門教育 科目	コミュニティ・ リサーチ	地域コミュニティの課題把握法 日本の地域コミュニティは、少子高齢化の進展にともなって深刻な危機に直面している。その様相は都市と地方で異なっているうえに、学際的に対応すべき多面性も呈している。その一方で、地域コミュニティの抱える課題を住民自身がリサーチし、将来のヴィジョンを形成して、具体的なアクションへつなげていくような動きも活発化している。この授業では、そうした地域リサーチの方法と実践を習得する。	水垣 源太郎 寺岡 伸悟
文学部 専門教育 科目	コミュニティ・ アクション	地域コミュニティの課題解決に向けた活動実践 日本の地域コミュニティは、少子高齢化の進展にともなって深刻な危機に直面している。その様相は都市と地方で異なっているうえに、学際的に対応すべき多面性も呈している。その一方で、地域コミュニティの抱える課題を住民自身がリサーチし、将来のヴィジョンを形成して、具体的なアクションへつなげていくような動きも活発化している。この授業では、前期のコミュニティ・リサーチを踏まえ、そうした地域課題に対するアクションの方法と実践を習得する。	寺岡 伸悟 水垣 源太郎
文学部 専門教育 科目	文化メディア 学実習B	取材実習。奈良県内のフィールドワークおよび調査報告書の作成。今年度は、生駒市の宝山寺門前町を取材します。この門前町は宗教集落、観光集落、歓楽街など多様な顔を持つ、大都市近郊のとても興味深いフィールドです。前期開講「現代民俗論演習」と連動する内容なので、そちらの科目も必ず履修すること。	内田 忠賢
文学部 専門教育 科目	なら学演習	奈良に関連するものとして、寺社の儀礼や、伝統的町並みとその活用、伝統工芸や食文化、地域づくり等のテーマをあらかじめ提示します。学生各自が、その中から個別のテーマを選んで、研究発表をして全員で討議します。また、実地のフィールドワークも予定しています。奈良を中心にしてテーマ設定をしていますが、必ずしも奈良に限定するものではなく、学生が希望するテーマ、他地域と奈良の比較という観点も可能です。	武藤 康弘 寺岡 伸悟
文学部 専門教育 科目	地域探究 実践演習	現在、社会問題として注目されている地方の維持・再生とも関係した「中山間地域」について、本学の共生科学研究センターの協力も得ながら、その現状と課題について考える。前半は、奈良県吉野郡下市町を事例として取り上げる。後半は、奈良県南部の十津川村を訪問し、2011年紀伊半島大水害のその後の状況などを調査する。2つの事例の「中山間地域」にみられる共通点や相違点なども考えつつ、奈良県に位置する奈良女子大学で学んでいる皆さんに、広い意味での奈良を色々とよく知ってもらいたいと考えている。	高田 将志 吉田 容子

区 分	科目名	授業概要	担当教員
文学部 専門教育 科目	地域社会の 課題演習	私たちの社会は、常に大きく変化している。例えば、経済のグローバル化の影響は、外国人労働者やその家族の居住するエスニック・コミュニティを生み出したり、外国人観光客の増加で、観光地や商業地のなかには賑わいを取り戻しているところがある。一方で、少子化や高齢化の進展は、地方における過疎化を加速させ、限界集落を生み出している。本授業では、私たちの生活の拠りどころである「地域社会」が現在どのような問題に直面しているのかを、受講生と一緒に、諸地域の事例を収集しながら見ていく。 *本授業では、地域社会の現状や直面している問題について、受講生が主体的に情報収集を行って問題提起を行う。また、授業時間外の現地見学・調査（奈良県内・日帰り）や、ゲストスピーカーの講演を予定している。	吉田 容子
文学部 専門教育 科目	現代民俗論 演習	奈良県内の伝統地域、伝統社会、伝統文化の変容を学びます。今回は、大都市近郊の宗教集落、生駒市の宝山寺門前町について深く学びます。この門前町は宗教集落であると同時に、観光地、歓楽街の顔を持つ、とても興味深い地域です。授業では、宗教集落、門前町に関する諸研究、宝山寺門前町に関する調査報告などを精読します。前期開講「文化メディア学実習B」と連動する内容ですので、そちらの科目も必ず履修すること。	内田 忠賢
理学部 専門科目	森林生物学 野外実習	奈良県は面積の77%を森林が占める全国有数の森林県である。また、ニホンジカが高密度で生息する山林が随所にある。この実習では奈良県の山林における植生観察を通じて奈良県の山林を構成する主要な樹種の分布と特徴を学ばせるとともに、シカによる食害の実態を観察し食害防止の取り組みなどについて学習することを通じて環境保全の在り方について考えさせる。	酒井 敦 他
理学部 専門科目	河川生物学 野外実習	河川生態系の構造と機能について理解を深めるために、本学自然環境研究施設（東吉村）に宿泊し、以下の実習を行う。 (1)環境観測、とくに水質の経時的変化：溶存酸素、pH、炭酸濃度、水温の観測 (2)生物調査：水生昆虫類の種類相（採集と同定）に基づく生息場所と水質の評価 (3)水生生物を使つての生理学的実験 (4)魚類の個体数推定	佐藤 宏明 他
生活環境 学部 専門科目	地域居住学	地域居住学では、まちづくりの視点から、様々な社会問題を考え、対応策を検討する。取り上げる題材は、できる限り現時点で社会的に注目されているものとする。この授業を通じて、まちづくりに関する基礎的な知識を獲得し、それを基にした理論的思考を身につける。	中山 徹
生活環境 学部 専門科目	福祉 住環境学	社会の高齢化の急速な進行により、高齢者や障害者のための住環境整備は、現在の大きな課題である。授業では、高齢者および障害者の視点から、住まい、地域、施設にいたる住環境整備の重要性や、理論的背景、具体的な手法等について、体系的に講義する。福祉住環境コーディネーター検定試験の受験者にとっても、基礎講座的な意味をもつ	室崎 千重

3. 「地域志向科目」の事例紹介

地域志向科目29科目のうち、地方創生理解科目の「なら学」、プロジェクト科目の「キャリアデザイン・ゼミナルB(52)(奈良の木造形学習)」ならびに「キャリアデザイン・ゼミナルC(4)(日本の奈良を知る)」の3科目についてその内容を紹介いたします。

(1) 「なら学」(教養教育科目) (*1)

奈良を知り、関心をもたせるための科目で新入学生を中心に全学生に広く受講を推奨しています。学生生活の第1歩を踏み出す地となった「奈良」。「奈良」をキーワードにした奈良女子大学教授陣によるリレー講義形式で奈良について多面的な知的関心や学問的に考える能力を養うことを目的として実施しています。



「大学的奈良ガイド」(なら学プロジェクト編, 2009年)

「奈良の概要」	寺岡伸悟
「奈良の祭」	武藤康弘
「都城論」	館野和巳
「万葉論」	西村さとみ
「東大寺論」	西谷地晴美
「奈良公園」	佐藤宏明
「奈良の自然地理」	浅田晴久
「世界遺産建築」	上野邦一
「奈良の仏教美術入門」	加須屋誠
「奈良の地域文化と産業」	寺岡伸悟
「奈良のアートとまちづくり」	山崎明子
「吉野論」	水垣源太郎
「近代奈良と娯楽文化」	内田忠賢
「地図と奈良」	西村雄一郎

授業の感想

様々な視点から奈良を知り、学ぶことができた。

奈良の観光地の歴史を芸術や地理学などいろいろな面から学べたので良かったです。

古代奈良の歴史から現代奈良の特色まで幅広く情報を手に入れることができた。また、奈良の特産品などは自分の周りの人との話題となって楽しかった。

毎回違った視点から奈良を見ることができ、新しい知識が増え、奈良についての理解が深まりました。

奈良は鹿や神社・仏閣だけではないということを知った。

奈良市だけでなく奈良南部の話や奈良の歴史を学ぶことができた。

奈良の産業やアート産業を学んで奈良の魅力に対する理解が深まり、奈良の外部に発信していきべきコンテンツをもっと知りたいと思うようになりました。

奈良に進学し、奈良のことを少し詳しくなったと思っていたが、私の知っているのは、奈良市にどんなものがあるのかなどといった程度の知識だった。鹿による奈良の宣伝効果と被害、吉野林業、奈良の地理などただ生活しているだけでは気づけないことをこの授業で学べた。

(2) 「キャリアデザイン・ゼミナールB (52) (奈良の木造形学習)」キャリア教育科目 (*2)

林業体験や製材所見学を通して奈良南部東部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、暮らしの中の木の活用について学ぶ科目です。奈良の木を用いた箸とスツール製作などモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしの実践を考え提案しています。また、奈良県・奈良の木ブランド課が実施する「奈良の木の匠養成塾」に参加させていただき、地域課題に取り組み、地域の課題を解決する能力を身に付ける実践的な教育科目です。

年間授業内容

4月23日	・奈良の木の針葉樹と広葉樹を使用したお箸製作
5月14日	・奈良の木でスツール製作
6月18日	・講義「日本・奈良県の林業・森林」 ・製材所見学
6月26日	・講義「木材の魅力と奈良県産材の特徴」「木造住宅の防耐火設計」「吉野材の特徴と性質・川上サプリの活動について」
7月2日	・林地見学 ・製材所見学 ・木造体育館建設現場見学
7月10日	・講義「不揃いの木を組む」「モノゴトをデザインする～人・モノ・空間の関わりについて～」 「吉野材を使った魅力的な住宅使用例」
10月22～	・十津川村の林業を学ぶ：木造小学校の建設現場見学

～23日	間伐体験・皆伐現場見学、木工加工場の見学と十津川木材での木工 ・木のある暮らしで使うモノの提案発表
11月12日	・奈良の木を用いたモノづくり 構想
11月26日	・奈良の木を用いたモノづくり 構想、製作
12月10日	・奈良の木を用いたモノづくり 製作
1月14日	・奈良の木を用いたモノづくり 合評会



【写真 奈良の木の匠養成塾の様子】

(授業の感想)

座学を受けるまで、私は吉野の木について何も知らなかった。しかし、この講義を受けて、吉野の木の素晴らしさを理解できるようになっていったと思う。特に吉野林業は、他の地域と異なるところがあると知って驚いた。その一つに密植がある。吉野材は一般的な植栽に比べ、木が狭い間隔で植えられている。それは木の幹が綺麗な円筒形になるようにするためだと聞いて、なるほどと思った。少なめに植えたら、その分太い幹の木材ができると思うが、木の上の部分と下の部分で太さが違うものが出来てしまい、木材として切り出す時に無駄な部分が出てきてしまうかもしれない。そういう面で吉野材は優れていると思った。また、吉野材が、年輪が細かいことや節が少ないことを知って、とても品質の良い木材なのだとよく分かった。このような木材を生産するためには何度も間伐や枝打ちを行い、手入れをしっかりとしなければならないので、かなり手間がかかるのだと思った。木造住宅の防耐火設計の話も印象に残っている。木は燃えるので木造住宅で火に強いなんてありえないと私は今まで思っていた。しかしこの話を聞いて、その考えは

一変した。木材は燃えるが、ゆっくり燃えるのだと知ったからである。動画で、木材でできたパネルを火が出ているところに被せてどのようにパネルが燃えるかをみる実験を見て、火が直接触れていない面に全く変化がなくて、とても驚いた。そばで立っている作業員の人たちも全く暑そうにしていなくて、木材はゆっくり燃え、熱を伝えにくいということがよく理解できた。確かに、このゆっくり燃えるという点は防耐火設計の建築物を作る上で長所となるなどと思った。また、火源があっても、周りに可燃物がなかったり、空間ができていれば火事は広がらないということも分かった。このようなことに加えて、避難路を確実にする工夫などを考えて設計すれば、木造住宅でも防耐火基準をクリアした建築物を作れるのだと理解できた。

小川さんによる「不揃いの木を組む」の講義もとても印象的であった。小川さんは職人の暮らしを実際の経験をもとに話してくださった。まさに現場で生きる人の生の声だった。小川さんは宮大工の仕事をしていて、法隆寺を修復するには法隆寺を作れる人ではないとダメだと言っていて確かにそうだと感じた。伝統ある建物を後世まで、その美しい姿を保ったまま残していくには高い技術やその修復にける強い気持ちを持った人ではないとできないことだと思った。また、宮大工になるために弟子入りをして今まで学んできたものは授業で習うこととは全く違うのだということもよく分かった。私たちは何もかもを教えてもらって生きてきたが、親方を見て自分で考えて行動をしてきた小川さんの話を聞くと、自分は受け身になりすぎていたと思った。意思を強く持って一つのことを続けられる芯の強い人間になりたいと思った。

吉野には「枝打ち」という文化があることを初めて知った。節の少ない製材をたくさん市場に出せることは、外見重視の利用者が多く需要が大きいと思うので、売る側、そして買う側の両方に喜ばしいことだと思った。ただひたすら枝打ちをするのではなく、木が呼吸と光合成ができるように、柱の長さ分を考慮した枝打ちを行うという点から、木を大切にする思いが伝わってきた。建築に関わる上で「材を大切に」という基本的なことを教えてもらった。木の乾燥機の存在も初めて知った。ここでも、木の細胞のことまで考えた温度設定をされていて、「木は生き物」というお話からも、木材に寄り添った事業をなされていることが伝わってきた。木材を、効率よくかつ綺麗に乾燥するための丁度いい温度を見つけるまでの過程を思うと、製材になるまでの過程に、奥深さを感じた。吉田製材さんで、加工前の木を実際に触らせてもらった時に、木材がかなり水分を含んでいることがわかり、加工後の製材との違いを実感した。乾燥の必要性と乾燥効率を上げるための乾燥機の存在意義を知ることになった。乾燥機の燃料に化石燃料ではなく、作業過程で出た端材を利用して、空気汚染とごみ問題に影響を及ぼさないという、環境への配慮がなされていたことから、より多くの側面から事業を支えることを学んだ。また、櫻井さんで、集成材を間近で見てその美しさに目を奪われた。集成材は四角形のイメージが強かったが、丸柱もつくれるのだと分かった。ムク材よりも強く、減圧乾燥機のおかげで背割りのない集成材は、需要の大きさから、もっと広まるべきだと思った。「よし坊」とともに吉野材がもっと広まっていくことを願ううえで、魅力を知る私たちが吉野材の拡大を支えていかないといけないとも思った。

乾燥において、吉野の木材を和歌山まで川に流して運んだことや、水中貯木というものがあることを聞いた時、木を水につけたら含水率が大きくなるために乾燥に時間がかかって大変ではないのかと思った。しかし、実際は逆で、乾燥が楽になるのだと知って驚いた。昔からそんなメカ

ニズムがあることを知っていたのかは分からないけれど、知恵の素晴らしさを感じた。また、スギの木の中心は赤く、ヒノキの木の中心は白いという基本的なことから、ヤング率や含水率の計測する機械があることも初めて知った。1度の講義にしか参加することができなかったが、1度だけでも得ることが多かった。後期に奈良の木を使って実際に自分たちで物を作る際に、また、これからの自分の建築に関わる姿勢として、建物や家具のもととなる材に気を配ること、大切にすることをしっかり根底に持ち、材を生かしていきたい。

製材所の見学では、過酷な労働環境の中、たくさんの工程を経て吉野材が誕生するのだということを知った。普段は見ることのできない場所だったので貴重な機会だった。徳田銘木さんに見学に行ったときは、木材の使用について新たな考え方を教えてもらった。枝分かれが激しい木やまっすぐでないといった規格外の木を製品化している。階段の手すりにしたり、柱にそのまま使って洗濯物かけたり、幼稚園で園児がのぼったり。使い方がおもしろいし、自然の形をそのままデザインに生かしているのが、家に一本あるだけで存在感がすごい。子供のうちから人工的なものばかりでなくありのままの自然に触れられるのはいいことだと思う。そんな風に木のぬくもりに触れて育った人は、一生木のよさを忘れないのではないだろうか。山林を見学したときは、厳しい現状を目の当たりにしてたくさんのことを考えさせられた。きちんと管理されている部分と、されていない部分。木の根がむき出しになっていて危険な状態の場所もあった。この状況を打破するには、とにかく木を使ってもらうことが一番だと思う。日本で家を建てるのだから、外国産よりも国内産のものを使ったほうが湿度や四季の気候の変化に対応できるはずである。熊本駅の駅舎や五條市の体育館のように、公共の建物に木を使ってもらうことで、国内産の木のよさをたくさんの人に感じてもらえるのは一つの良い方法だと感じた。

座学ではたくさんの貴重なお話を聞くことができた。特に、宮大工さんの話が聞けるのは良い機会だった。宮大工は大きな木を使うから木のくせを直せない。だから生かす。私は高校生のとき、小川さんのお師匠である西岡常一さんの考えが書かれた本を読んだことがあり、そこにも木の良さや適材適所の話などが載っていた。木を巧みに使う技術は受け継がれていかなければならないと感じた。インテリアをデザインするときは、生活のあらゆる知識が必要になるのだと感じた。たとえば印象的だったのがハンガーである。使っていないときはハンガーっぽくなく、インテリアになる。でもしっかり服の形をきれいに保つことができる。この場合だと、衣服に関する知識が必要になる。ものをデザインするときは、それを使う人への深い理解が必要で、そこにどんな問題が隠れているのかをしっかりと見つけて改善できるようなものをつくる、という松本さんの考え方にはとても共感した。奈良の木の匠養成塾を受講するまで、私は奈良の林業について全く考えたことがなかった。しかし、4回の講座を通してその現状を知った今、奈良の木のよさをもっと日本中の人に知ってもらいたいという気持ちを強く抱いている。木であっても、ものによっては腐りにくかったり、うまく使えば火事に強くなったりするというのは目からうろこだった。

後期からはいよいよ奈良の木を用いてもづくりを考えていくが、たくさんの方から奈良の木の利用についてのアイデアのきっかけをいただけたので、それも参考にしながら、手で触れて香りをかいで、全身で奈良の木のよさを感じてもらえるものを作りたい。

(3)「キャリアデザイン・セミナーC(4) (日本一の奈良を知る)」(キャリア教育科目) (*3)

本講義では、奈良県が誇る「日本一」の産業を外部講師によるリレー講義形式で紹介しています。奈良で働く魅力や暮らす魅力を語っていただく授業で、就職に向けた業界研究の一環として、全学部の学生に受講を推奨しています。

学習目的、目標は以下の通りです。

- ・奈良県に関する様々な知識を獲得、理解し、自分の言葉で表現できるようにする。
- ・奈良県に関する関心を深め、自身の将来を考えるきっかけとする。
- ・「日本一」の実績を守る業界トップの方のお話を、直接聞くことにより、自分の将来を考えるきっかけとする。

(例)キャリア教育科目:「日本一の奈良を知る」

キャリアデザイン・セミナーC(4) 「日本一の奈良を知る」

【受講していただくメリット】
 幅広い専門知識・実践的な経験豊富な講師陣について、専門的な知識を習得して学生の将来に向けた業界研究の一環として、自身の将来を考えるきっかけとする。また、奈良県に関する関心を深め、自身の将来を考えるきっかけとする。

第1回目 ガイダンス
 ●9月30日(金) 107教室 奈良県立総合学習センター 第107教室
 13時～15時45分 15時15分～16時
 6,7年(1,2限)開講

第2回目
 【おやつ-桜餅の文化のイベント-】
 おやつ-桜餅文化
 奈良県産 桜餅 1箱
 ●10月12日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

第3回目
 【奈良県産物-1-】
 奈良県産物 奈良県産物 奈良県産物
 ●10月19日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

第4回目
 【おやつ-桜餅の文化-】
 おやつ-桜餅文化
 ●10月26日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

キャリアデザイン・セミナーC(4) 「日本一の奈良を知る」

第5回目
 【奈良県産物-2-】
 奈良県産物 奈良県産物
 ●11月2日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

第6回目
 【奈良県産物-3-】
 奈良県産物 奈良県産物
 ●11月9日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

第7回目
 【奈良県産物-4-】
 奈良県産物 奈良県産物
 ●11月16日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

第8回目
 【奈良県産物-5-】
 奈良県産物 奈良県産物
 ●11月23日(水) 107教室 13時～14時30分
 7,8,9年開講

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)
「日本一の奈良を知る」 第2回目「キャラクター柄弁当箱のシェア日本一」

「キャラクター弁当箱シェア日本一」と題して開かれました。スケーター株式会社代表取締役鴻池 良一氏をお迎えして、日本一になるまでの道のりについてお話しいただきました。

目標を持ち達成するまでには戦略と戦術を考えることが大切であること、「ナンバーワン」を達成した次は「オンリーワン」を目指しているという大変貴重なお話をお聴きしました。

また、各部署管理職の社員の方々からは、これから社会人となる学生にとってイメージしやすい具体的な仕事内容やその魅力についてお話しいただきました。参加した100人を超える学生達は熱心に聞きっていました。



(授業の感想)

キャラクター弁当箱のシェア日本一の会社がまさか奈良にあるということには驚いた。様々な部署の人達の話聞いていてこの会社には男女の差など関係なく働きやすい環境が整っているということが伝わってきた。今まで就職するなら大手企業への憧れが強かったが、働く環境の良さや長く勤められる会社であるかどうかを見極めて選ぶことも大切なのだなと感じた。

私は今回の講義で初めて「スケーター」という会社の存在を知りました。思い返してみると、私達の生活の中でお弁当や水筒といったキャラクター商品はよく目にすることが出来ます。そういった中でシェア60%の数値はすごいものだと思います。会社の方のお話しを聞いて、女性の方が活躍できることやアットホームな会社の雰囲気にとってもひかれました。そういった土壌が国内で広く活躍を行うパワーの源になっているように思います。今回のお話で、就業についてとても前向きなイメージを持つことができました。本日はありがとうございました。

机の上に置いてあった商品を見て、お店で見たことのある商品が数多くありましたが、これら商品を奈良に本社のあるスケーター株式会社がつくっていることを初めて知りました。常に前向きでチャレンジ精神をもって、多様なニーズの変化にも柔軟に熱心に対応する。会社の体制に非常に感動しました。また、各部署の方の話からそれぞれの部署で会社全体をより大きく、より良くしていこうと日々奮闘されており、これからどんな商品をつくれるのだろうと楽しみです。本日はありがとうございました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)
「日本一の奈良を知る」 第3回目「茶筌生産量日本一」

生駒商工会議所会頭 竹茗堂左文 堂主 久保 昌城(号左文)氏を講師としてお迎えし実施されました。講師からは茶筌の歴史では裏千家、武者小路千家で茶筌の形が違ふこと、竹の種類は様々であるが繊維が固く密度が濃い太平洋側の山の竹が最も適していること、茶筌の種類は「ぼてぼて茶筌」「ぶくぶく茶筌」「ばたばた茶筌」等があること等々の説明がありました。

また、茶道人口はピーク時の1/3に減少しており、時代のニーズに合わせて、手軽にお茶を楽しめる商品の開発の必要性や敷居の高さを払拭し、もういちどお茶のブームを起こしたい、そのためには行動をおこさないといふはじまらないと熱弁を振るわれました。

今回、授業を受けた学生は講師の切望にも似た話を熱心に聞き入っていました。受講学生は順番に展示物を見まわり、今まで見たことのない実物を間近で見ることができ有意義な時間を過ごしました。



(授業の感想)

奈良県が茶筌の生産量日本一ということで、その技術が残った背景やどのような竹が茶道に向いているのかを知ることができ、勉強になりました。竹の種類によってどの流派でどのように使われているのか、茶筌の制作には内職の方が欠かせないことなど、貴重なお話を聞くことができました。奈良で生産量が多いものや、有名なものと聞かれても、なかなか答えられなかったのですが、授業を受ける毎に奈良県の知らない一面を学べてとても興味深かったです。

今回は「茶筌生産量日本一」ということで茶筌について学びました。私自身、茶道とは無縁の人生を歩んでおり、何も知識がない状態でしたが、実際に本物の茶筌とそれが出来るまでを見ると本当に繊細でかつその中に職人さんにしかできない技がみえて興味をもちました。昔の全盛期には花嫁修業のひとつとして多くの女性にたしなまれてきた茶道も、現在はその3分の1の人口になってしまったらしいので、それを衰退させないためには、より多くの人々が気軽に茶道をできる環境を生み出すことが大事です。久保さんをはじめとする竹茗堂左文さんは初心者にも使いやすいよう、長めのものを作ったり、ジャパンEXPOでフランスに広めたり、今までにない新たな方法で茶筌の魅力を伝えてすごいと思った。有意義な時間をありがとうございました。

奈良県が茶筌生産量日本一でないと、なかなか聞くことのできない茶筌、お茶に関する話を聞いて貴重な経験でした。1日に2人で10個作れないぐらいというお話を聞いて、それでも生産量日本一を保っているということは、継続的な信念と努力がないとできないと思う

ので、本当に凄いと感じました。最後の「行動を起こさなければ何も始まらない」という言葉がとても胸に響きました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」 第4回目「グローブ生産量日本一」

三宅町商工会 寺澤 潤一氏から、聖徳太子に由来する「太子道の集い」、生誕800年を迎える三宅町出身の僧侶忍性に関する事など三宅町の魅力について話がありました。吉川清商店 吉川 誉将氏からは、皮を裁断していた職人が、スポーツメーカーミズノから依頼されたことがグローブづくりのはじまりとされていることなど三宅町とグローブづくりの歴史、素材選びから仕上げまでグローブが出来るまでの作業工程について話があり、後継者問題等、グローブ業界の課題について触れられ、三宅町のグローブづくりの歴史を広く伝えていくことや海外生産している大手メーカーに負けない、「made in japan」ブランドを確立していきたいとの熱意がこもった話に参加学生は感動していました。有限会社ティー・エーシーインターナショナル代表取締役 置本 貴司氏から、若手グローブ作り職人さんとの出会いを通して、三宅町だからできることはないかと考え、グローブ作りの技術を生かしたオリジナルブランドを立ち上げたこと、現在、高品質のレザーを用いた靴を中心にオリジナル商品を販売中で、アイデアを生かし、世界へ向けて展開していきたいと意欲的な取り組みについて話がありました。



(授業の感想)

グローブをはじめとしたスポーツ用品は、私にとってはブランドのものの方が価値があると思っていました。それはやっぱり、今回のような商工会や職人さんたちのことを何も知らなかったからなんだなと思いました。しかし、今回実際に作ったり関わったりしている人の話を聞いて見方が変わりました。グローブの製造工程もたくさんの工程があって、その中には手作業も必要でこれぞ職人というかんじだなと思いました。グローブに約30ものパーツがあることや、子牛の革が最適だということも初めて知れてとてもおもしろかったです。また、グローブ作りの技術力を他の商品に生かすというアイデアも素晴らしいなと思いました。1つの小さなアイデアが色んな人に伝わってたくさんの人と一緒に1つのものを作り上げる、そんな仕事を私も将来やってみたいです。とてもあこがれます。今回のお話を聞いて、グローブへの関心が高まったとともに、自分も普段からアイデアを形にするようにしていきたいと思いました。

地場産業という観点から企業について知ることができて面白かったです。三宅町についての説明からしていただけたので、グローブ生産に関して町おこしと密着していることがよく感じられました。スポーツ用品産業にも興味があり、今日講義に参加させていただきましたが、町をおこしていくという仕事にもとても興味がわきました。三宅町のグローブ業界でも他の伝統産業でも聞くような後継者問題や町の外に若者がでてしまうことなど、どう町ぐるみで支援していくのかということにも興味がありますし、やってみたい！考えてみたい！と

も思いました。私は、野球はしていませんが、スポーツはたくさんしてきたので、スポーツに関連する仕事に惹かれます。少しそのような仕事の内側が見られ面白かったです。

たくさんの情報をとこところにちりばめながらお話していただいたので、最後まで楽しんで学ぶことができました。野球は好きだが三宅町という名前もスポーツ用品特にグローブ作りが盛んであるということも知らなかった。なんでもネットで調べてしまうIT世代の若者なので、ネットで検索して面白いものがあればぜひ訪ねてみたいと思う。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)

「日本一の奈良を知る」 第5回目「業務用卵焼き機シェア日本一」

株式会社品川工業所庄野明社長をお招きして、「為己不希財」、「為客不辞責財」を堅持し、実行してきたこと、社章(3つのQ)の成り立ち、社訓が社章を基に考案されている等の紹介がありました。1910年の創業後、全国菓子大博覧会において、製菓機器が一等金牌を受賞したこと、モダンミキサー(餅(モ)や団子(ダン)製造用ミキサー)の開発、万能攪拌機の組み立て、工場の新築が分岐点となり、調理の工業用製造装置の開発を中心に発展。高速混練造粒機「トリプルマスター」で農林水産大臣賞を受賞、第一回奈良県ビジネス大賞最優秀賞を受賞するなどの輝かしい実績や、本社工場を新築し大型テスト室・事務所フロアを一新したこと等が話されました。製品紹介では、フラット型炒め機「AQ-F型」による炒飯と焼きそばや卵焼成機(ロールタイプ)を使った卵焼きの調理過程の紹介があり、「奈良から世界へ」躍進していく品川工業所の現状と未来像について話され、最後に、次の100年を目指し、舞台裏から世界の生活を支える企業として品川工業所は革新・成長を続けていると淡々と語られる社長の人柄や身の回りの生活用品が品川工業所の開発製品であることを知り、学生は大きな感銘を受けていました。



(授業の感想)

メーカーの商品はすべて機械まで一つの会社で作っているイメージだったので、おいしいお菓子やご飯の製作に製造装置を開発している会社も関わっていることを知りました。炒飯や焼きそばを一瞬で作ってしまう機械や大量生産する商品を作る機械の技術は見ていておもしろいので工場見学など見に行きたくなりました。たまご焼きの機械はロールする過程は人間がまくのも難しいと思うので機械の動きで再現しているのはすごいと思いました。前に並べてあった商品もほとんど見たことがあったので、品川工業所の機械で作られたものをかなり食べていると思います。「奈良から世界へ」という話では海外に機械を輸出して技術を伝え、「たまご焼き」のような日本の味が世界に広がることは素晴らしいと思います。日本の食を支えている方の話を聞いてよかったです。ありがとうございました。

食品加工機械のような工業機械を作る企業は、普段会社の名前を見ることはないのですが、この品川工業所の機械を使っている企業が多いのにとっても驚きました。セブンイレブンのシュークリームやパックサラダ、カルビーのお菓子などはとても身近です。日本を支える企業のひとつだなあと思ったのと同時に、奈良の企業であることにとっても感動しました。

品川工業所さんでは卵焼きのような食品だけでなく、製菓や医薬品などさまざまな分野において作られていることを知りました。スーパーやコンビニなどでよく見かける商品もここで製造されていたり、その機械によって作られていることを知り興味深い内容でした。私たちの日頃食べている食品などがこのような機械で作られているのだな、と製造過程を知るとは食文化を考えるうえで大切な視点の一つだと気づくことができました。焼きそばや炒飯を作っている過程で使われている機械も工場見学をしているような気分でした。今回の講義をきっかけとして改めて食について考えてみたいと感じました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」 第6回目「集成材出荷額日本一」

奈良県森林技術センター伊藤貴文所長から、集成材産地としては奈良県南部地域に限られた地域産業としては日本唯一であるとの話があり、実際の木片等を使ってそれぞれの木の特性(樹液のにおい、シロアリに対する耐性等の性質)、育成の仕方による違い、桐の木をプレスした木の方が冷たく感じること、プレスした木に樹脂を塗ることにより鉄のような木材を製作することができることや木片の膨張率の違い(フラスコの中の木による工作物を取り出すことができない)等について、丁寧に説明がありました。また、パワーポイントを使って木質材料の種類ごとのエレメントに関すること、合成材の繊維方向による特徴、集成材の利点として製材よりも集成材の方が任意の寸法の部材を使用するので無駄が少ないこと、均一に乾燥した部材を接着して製作するので施工後に変形が少ないこと、無節の製材を製造できること、任意の強度の部材の製造が可能であることや任意の曲率半径の湾曲部材が作れること等の話がありました。次いで、吉野の美林に関わる話の中で、吉野は林業の発祥の地であること、長い年月をかけて大木を育成する方法、年輪緻密な材を作る工夫や吉野杉の強度について、また、吉野林業に密接に関係する樽丸生産の成り立ち(味噌の需要が増加したことによる)、樽と桶の違い、“撞木”生産のシェアの100%は奈良県産のものであること、「板」(木が反る)と「枿」(木がまっすぐ)の漢字の意味等の知らなかった話しに受講学生達は興味津々な面持ちで聞き入っていました。



(授業の感想)

おもしろかったです。初めて知ることが多くて興味深かったし奈良の吉野杉が昔からすぐれていて、人々が努力してきたことも分かってよかったです。集成材の有効性についても具体的に説明して下さいました。ありがとうございました。

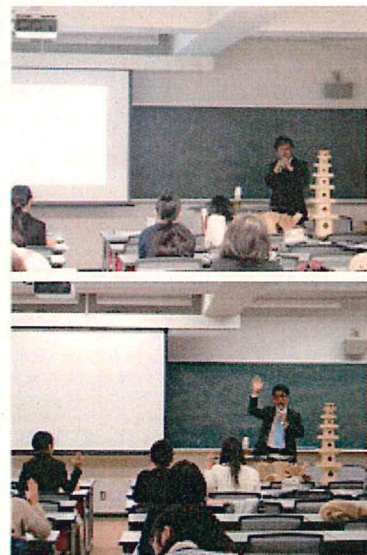
実際に木材に触れてみると、金属製品などと比べて、やわらかくあたたかいような印象でした。また木材には香りもあって、非常に落ち着くものでした。オイルの香りは5つともそれぞれに違って、さわやかなものから深い香りまでさまざまな香りがあることに気づきました。木材の性質を利用して工夫をこらした製品を手にとってみて、改めて木のあたたかみに触れ、木材の素晴らしさ、魅力に気づくことができました。身近にある木材を大切にしていきたいと思いました。

集成材というものの存在は、CLTとセットでなんとなく知っている程度でした。今回の講義で、集成材の優れた点が良くわかりましたし、奈良県中部～南部に根付いた産業であることを初めて知ることができました。また、生活の中に溶け込んでいる木材にも、本当にいろいろな種類があり、いろいろな工夫がなされているんだなあと感じました。日本の山林を守るためにも国産の木材を活用していくおとはこれから本当に重要なので、魅力的な製品がますます増えてほしいと、心から思います。CLTについてももう少しお話聞きたかったです。

木材の特徴について、実際に手で触れたりしながら講義を聞くことができたので、木材製品についてさらに興味を持つことができました。また、奈良県は林業が盛んなことは知っていましたが、吉野林業が無節材を生産していることや集成材の利点、どこに集成材が使われているか、集成材の特徴などについては知らなかったもので、勉強になりました。吉野の木々の特徴についても知る機会はあまりないと思うので、奈良県の林業について詳しく知りたいと思っています。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」 第7回目「割り箸生産量日本一」

割り箸・箸袋製造卸「兵庫商店」代表兵庫保行氏、箸の販売店の峠喜重朗商店代表取締役の峠喜志嗣氏をお招きして実施されました。兵庫氏から、割り箸づくりルーツ、下市町が割り箸生産に欠かせない杉の生育に適した気候であること、割り箸は桶や樽丸作りの際に捨てられる白身(木材の白い部分)を利用して生産されていたこと(現在は桶等の生産が減少したため利用されていない。)、杉の割り箸はのこぎりを使い、桧の割り箸は刃物を使用して生産されていること、割り箸の種類やその種類によって販売価格が異なること(一膳3～8円、高い物で100円)、また、割り箸の生産は数年前まで森林破壊に繋がっていると話題になったが、そうではなく捨てるはずの切れ端を利用しており(割り箸の木材利用率は0.1%程度)、洗剤を使う必要がなく川や海を汚さないし、捨てられた割り箸は土に帰るので究極のリサイクル商品であるとの話をされました。次に峠氏から、割り箸の生産は竹が利用されていたが、江戸時代にはいと木製の割り箸が作られるようになったこと、和食が無形の世界遺産に登録されたことにより、割り箸が世界に普及したこと、国内産の割り箸はJAL、シンガポール航空やエールフランス航空の機内食に利用されていること、全世界の日本食店は9万店(2015年)に増加しており割り箸の重要は伸びていること、割り箸の生産国は中国、日本、韓国、ベトナム等となっていると話されました。また三宝の9割が下市町で生産されているとの話もあり下市町や割り箸等についての見識を深める有意義な授業となりました。



(授業の感想)

「割り箸はエコ、究極のリサイクル商品」と聞いて、はじめは驚きましたが、お話を聴いて納得できました。下市町も田舎でありながらその良さがたくさん見られそうだとでも行ってみたいくなりました。300年前にも割り箸が売られていたことなど、とても奈良の歴史が感じられて興味深かったです。

割り箸について今まで使い捨てするのはもったいない、なるべく自分の物を使おうという意識をもっていましたが、実は廃材を利用していることが印象的でした。日本の食文化が世

界に広まっている超勢とともに吉野の割り箸と吉野の自然、歴史なども広まると素敵だと思います。また、下市町は割り箸だけでなく神具などの生産や柿、ハーブなど自然に密着してうまく活用する取り組みがなされていて学生のうちに一度訪れてみたいです。ゆるキャラと伝統工芸、文化などを一緒にPRする取組も興味深いので、今度機会があったらコミュニケーションに参加してみたいです。

割りばしの歴史が思ったより古いことに驚きました。また、割り箸というと森林破壊というイメージが一般的にはあったと思いますが、実は木材の使われない部分を利用したエコなものであるという認識がもっと広がって、エコな割り箸を積極的に使うようになったらいいと思います。また、下市町という名前は聞いたことはありましたが、どこにあるのか、どんなところかということはいまだにあまり知らなかったもので、パンフレットがいただけで良かったです。

私は最近まで割り箸は環境によくないものだと思っていました。しかし、今回の講義で割り箸は柱などを作った残りを利用して作っているということが分かりました。それを聞いて、割り箸は木を有効活用した環境に優しいものなのだなと思いました。さらに、300年も前から売られていたことでとても驚きました。また、下市町では箸の他にも柿などのフルーツや、人気が高まってきているピザハウスなど、興味のそそられるものが多くあることも分かったので、ぜひ一度遊びに行ってみようと思いました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)

「日本一の奈良を知る」 第8回目「金魚販売量日本一」

大和郡山市地域振興課観光戦略室長 植田早祐美様、同産業水産課農業・金魚係長 宮本和幸様をお招きして実施されました。宮本様から金魚の歴史(約2000年前で、中国南部で突然変異(赤色)した野生のフナが発見され、選別淘汰の末、今日の金魚に至ったこと、大和郡山市における金魚養殖の由来は、1724年に柳澤吉里侯が大和郡山へ入部のときに始まり、明治維新後は職録を失った藩士や農家の副業として盛んになったこと)、金魚の販売量(平成5年をピークに減少の一途を辿っており、その要因としては養殖業者の高齢化や需要の減少など)、改善策として金魚産業の活性化のために「金魚品評会」、「優良企業養殖コンクール」、「金魚養殖の体験学習」や「金魚マイスター養成塾」等を実施しているとの話がありました。植田様からは金魚で町おこしと題して「全国金魚すくい選手権」の紹介を女性向け漫画雑誌に掲載の「すくってごらん」の描写を通してお話しされました。大会にはつばがある帽子を被ることが禁止されている理由、金魚を上手にすくうコツや大会は独特のルールにより行われており、今年度の大会にはスタッフとして2名の奈良女生の協力があったことなどでした。「平和のシンボル、金魚が泳ぐ城下町」にある郡山城跡に関わるイベントなどの話がありました。受講学生の多くは大和郡山市の金魚が有名であることは知っているようでしたが、講師から掘り下げられた金魚や郡山城等の話を初めて聴き大和郡山市に関する見識を深めることになり有意義な授業となりました。



(授業の感想)

お祭りでは必ず「金魚すくい」があり身近な魚なので、奈良県の大和郡山市が販売量日本一というのに驚きました。海なし県なのに魚の養殖で日本一なのが面白いと思いました。金魚の入った電話ボックスや金魚のオブジェなど実際に見てみたいです。大和郡山のイオンの金魚のオブジェは見たことがありました。下宿でアパートがペット禁止なので魚も飼えない(?)ですが、金魚に癒されてみたいのでいつか飼いたいと思いました。養殖の過程で「選別」をするということでしたが、尾が悪かったり色があまり出ていない金魚も、金魚すくいなどで利用されると聞いて安心しました。「竹のす」や「通し」などあまり耳にしない道具を使うので興味がわきました。金魚すくい大会の全国大会があったり、漫画に大和郡山市が取り上げられていたり知らないことがたくさんあったので、奈良県のことを色々知れて良かったです。ありがとうございました。

金魚の種類豊富さに驚きました。帽子のつばが禁止である理由が面白いなと思いました。何か一つのことの特化して町おこしをPRするのはリスクもあると思うのですが、むしろ全国のマニアックな人々を観光に呼び寄せることができると良いと思いました。

「まちおこし」についてとても興味があります。金魚すくい選手権大会については「テレビチャンピオン」で観て知っていました。大和郡山というと金魚！みたいなイメージがあります。まちおこしをするというときにどのようにこのイメージを使うのかとか今日大和郡山におけるまちおこし活動を知れておもしろかったです。金魚のおうちデザインコンテストという取り組みもおもしろいなと思います。そのような戦略を考えて活性化させていくというお仕事はやりがいもありそうだなと感じます。電話ボックスを金魚の家にしちゃうとことか、どうやったらそんな案を思いついて、実行に移せるんだろう、、、そういうことを考えるのは大変だと思うけど楽しそう！と思いました。今日お話を聞いて漫画も面白そうと思いましたし、行ってみたい！と純粋に思いました。実際に金魚電話ボックスや机に金魚が泳ぐカフェ、50円で金魚すくいのできる道場など全然知らなかったのですが面白そうなのがたくさんだなと思いました。

4. 学生向けセミナーの実施

奈良女子大学やまと共創郷育センターでは、「地域志向科目」の実施の他、広く学生向けに「奈良」をさらに身近に感じていただくことや、多様な働き方を学ぶため、学生向けセミナーを4回実施いたしました。

やまと共創郷育センター第1回セミナーの開催 「奈良で輝く女性たち」

平成28年6月28日(火)

奈良県及び株式会社ウーマンライフ新聞社様のご協力を得て、やまと共創郷育センター第1回セミナー「奈良で輝く女性たち」を開催いたしました。

セミナーの前半では、奈良県こども・女性局女性活躍推進課長 金剛真紀 様より女性の活躍に関する奈良県の現状と「奈良県女性の輝き・活躍促進計画」の考え方について、さらに奈良県が進めておられる「女性翻訳者の養成・活躍支援」事業についてご紹介いただいた後、奈良県女性センター所長 上中 三恵 様より奈良県女性センターの取り組みについてご紹介いただきました。

セミナーの後半では、実際に奈良県で活躍している女性の先輩として株式会社ウーマンライフ新聞社取締役編集長 河本 敏江 様に女性の感性を生かした『女性を楽しむフリーペーパー作り』についてご紹介いただきました。



学生の感想

- ・女性支援に興味があったから。
- ・女性の社会進出と活躍に興味があるから
- ・奈良の女性の活躍について興味があったからです。
- ・女性が男性と同じ立場で働くことがよいと考えていたので、女性らしさを生かして働かれているお話が新鮮でした。
- ・女性センターの催しを知れてよかった。ぜひ時間を調整して行ってみたいと思う。
- ・将来の視野を広げるために様々な方のお話を聞きたいと思っており、また、自分自身もフリーペーパー団体に入っていて、河本さんの話に興味があったため。
- ・私自身も、地域で生き生きと働けるようになりたいと思っているので、今回のお話が、今後の自分の将来の参考になればと思い受講しました。

やまと共創郷育センター第2回セミナーの開催 「奈良の世界遺産」

平成28年7月26日(火)

奈良県及び奈良市観光協会様のご協力を得てやまと共創郷育センター第2回セミナー「奈良の世界遺産」を開催いたしました。

セミナーの前半では、奈良県地域振興部文化資源活用課 小池香津江 様より奈良県の世界遺産とその活用事例についてご紹介いただきました。セミナーの後半では、公益社団法人奈良市観光協会専務理事 鷺見哲男 様より「モノ」の観光から「コト・ヒト」の観光へという奈良市観光協会の事業展開についてご説明いただきました。参加者からは観光産業に対して興味が沸いたとの意見が多く寄せられました。



学生の感想

- ・観光のやろうとしていることがわかりやすかったです。
- ・「奈良ってどんなところですか？」と聞かれたらきちんと答えられるようになりたいと思いました。
- ・今まで観光業界にはまったく興味がなかったですが、すごく興味が湧きました。私たち学生のことを考えた話をしてくださったので為になったし、自分について考えることもできたので良かったです。
- ・奈良の観光がいかんじてできているか、点と点が結ばなければならないという内容が印象深かったです。
- ・奈良の世界遺産について知っているようで知らないことがたくさんありました。
- ・もっと奈良のことについて大学時代に知りたいなと思いました。
- ・スペイン人、イタリア人が奈良にたくさん旅行きているのにびっくりしました。
- ・JR 奈良から興福寺へ向かう道が『平成→昭和→大正→…』ってなっているのを初めて気づきました。
- ・「モノ→ヒト・コト」の中身や重要性などがよくわかりました。奈良県全体にとっても大切なことだと思いました。

やまと共創郷育センター第3回セミナーの開催 「未来の働くスタイル」

平成28年10月 5日(水)

奈良県内で活躍されているWomen's Future Center 代表 栗本 恭子 氏をお招きしてやまと共創郷育センター第3回セミナー「未来の働くスタイル」を開催いたしました。

第一部は、栗本代表から女性の働くスタイルの変化に対応した女性の働き方について講演が行われました。

第二部は、Future sessionというワークショップを通して、参加者一人ひとりが未来思考で女性の働き方について考えました。

全体を通して講演を聞き、また参加者同士が意見を出しあって刺激し合い、将来の女性(自分)の働き方や自身の人生設計について、考える良い機会となりました。

参加者から終了後、採ったアンケート結果によると大変満足であったとの意見が多く寄せられ、有意義なセミナーであったことが伺われました。



学生の感想

- ・想像していたより少し抽象的なワークだったのですが、自分が想像していなかったような“やるべきこと”を発見することができました。ありがとうございました。
- ・普段、同世代の人としか関わりがないので広い世代でいろんな立場の人たちと意見を交換できて、有意義な時間だった。
- ・まだ働くということがぼんやりとしか考えられていないので、これを機に人生設計をしっかりと考えていこうと思いました。貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。
- ・取り組みや、様々な人の意見等を聞くことができてよかったです。ありがとうございました。
- ・グループワークを通して、自分の今後について考えることができて、具体的に何をすれば良いのか少し見えてきました。
- ・将来、働くことも子育てもあきらめたくなくて、それって難しいことなのかなと思っていたけれど、女性の活躍の場は思っている以上に用意されているのだなと思いました。
- ・栗本先生がご経験された苦勞、特に子育てはもう少し具体的にお聞きしたかったです。どの様にして、苦勞を乗り越えられて来たのかアドバイスになると思いましたので…。

やまと共創郷育センター第4回セミナーの開催 「奈良クラブの活動とその歩み-奈良に」リーグクラブを-

平成28年10月27日(木)

奈良クラブGMの矢部次郎氏を講師として、やまと共創郷育センター第4回セミナー「奈良クラブの活動とその歩み-奈良に」リーグクラブを-を開催いたしました。

講師の矢部次郎氏から、サッカーに関わる世界の人口、サッカークラブの収益(放映権による収入等)やサッカーを取り巻く環境についてのお話がありました。奈良県のサッカーの状況に関して、奈良県はリーグに加盟していない9県の中の1県であること、自身はプロサッカー選手(名古屋グランパス)であったこと、故郷の奈良県に愛着を持っていることもあり、奈良県にリーグに加盟できるプロのサッカークラブを創設したいとの思いで奈良クラブを設立したこと等々の話がありました。

また、サッカーは技術より人間性であるとの理念に基づき、低学年から立ち振る舞いや身だしなみの教育を推奨していること、奈良クラブを通じて選手として町の為に活躍する人材を育成することや周りを元気にすることを理想に掲げクラブ運営に取り組んでいるとの話がありました。

参加学生達は今まであまり目に触れることや聞いたことのない講師の話に聞き入っていました。



学生の感想

- ・サッカーの話だと思っていましたが、スポーツを通じた人材育成、地元の盛り上げなどの話が主だったため、スポーツに興味がなかったですけど面白かったです。
- ・奈良クラブのこと、スポーツの力を矢部さんだからできる話をたくさんきかせてもらってすごく良い経験になりました。話もわかりやすく、奈良クラブのことを楽しく知ることができました。「勝ち負けよりも大切なものがある」というコンセプトの意味が深く分かって面白かったです。
- ・正直、奈良クラブのことはあまり知らなかったのですが、ただサッカーをするだけでなく、人と町とこんなにも大きくかかわっているということに驚きました。スポーツの力の大きさを知ることができ、とても勉強になりました。
- ・サッカーについてよく知らなかったので、初めて聞くことも多くていろいろ知れて良かったです。地域に密着型のスポーツクラブとして、これからも、みんなが楽しめる！そんなクラブで頑張ってもらいたいと思います。
- ・私も静岡出身のため地元ではサッカーが盛んでクラスに必ず5人はサッカークラブに入っている同級生がいました。いつも近鉄奈良駅の近くで奈良クラブのビラを配っている姿を拝見しているので、今回のお話はとても興味深かったです。頑張ってください。
- ・スポーツの力によって町の誇り、子供たちの憧れとなるクラブ作り、地域創造にかける熱い思いを感じました。

5. 地域活動拠点・下市アクティビティセンターの開所

「奈良女子大学下市アクティビティセンター」開所式 平成28年7月16日(土)

奈良女子大学は下市町農村環境改善センターに「奈良女子大学下市アクティビティセンター」を開所し、開所式を実施しました。

奈良女子大学と下市町は包括的連携協定を締結するとともに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」においては事業協働機関として地方創生に向けて協働しているところですが、「奈良女子大学下市アクティビティセンター」はCOC+事業で学生が下市町を訪問した際の活動拠点として、また、教職員・学生と下市町の方とが交流を深めるコミュニティスペースとして利用すべく開所したサテライト施設です。

今後、学生や町民の意見を反映しながら、観光振興、社会ネットワークの構築といった同町の地域創生に寄与できる事業を展開していきます。センター内には同町の木工舎で製作された木製机・長椅子も配置され、学生が同町の地場産業に触れながら学ぶことができる環境ともなっています。



6. 活動報告事例

- (1) 地域居住学における野迫川村での活動報告：担当教員 中山 徹
- (2) 住環境学基礎実習における十津川村での活動報告：担当教員 室崎 千重
- (3) 中山間地域における活動報告：担当教員 高田 将志
- (4) 地域コミュニティにおける活動報告：担当教員 水垣 源太郎
- (5) 歴史学実習における活動報告：担当教員 西谷地 晴美 他

(1) 地域居住学における野迫川村での活動報告

平成 28 年度・地域居住学

地域居住学(住環境学科専門科目)で野迫川村を訪問し(フィールドワーク)、それを踏まえてワークショップを開催した。その概要と参加者の感想文である。フィールドワークは 11 月 19 日、20 日に実施した。

1. フィールドワークの概要

11 月 19 日(土)

■ 北股集落見学

北股集落近くの野迫川村役場にて、北股区長さんから当時の様子や災害の被災状況について 30 分程お話を伺った。その後、現地に移動し北股地区の被災現場を見学し、区長さんから再度話を伺った。学生から出された質問にもお答え頂いた。

■ 大股集落見学

大股集落内を大股区長さんに案内して頂く。大股集落で取り組んでいるアマゴの養殖場を見学した。また、集落内を通る小辺路を実際に歩き、集落の歴史についても区長さんから話を伺った。

■ 狩猟について講義

野迫川ホテルにて地元猟友会長曾我部さんより、地元の狩猟について、獣被害等についてお話を伺った。猟師が減少している現状とそれに伴う森林保全の現状など、村の状況について現況を把握した。

11 月 20 日(日)

■ 池津川集落見学

池津川集落を見学し、池津川区長のお話を伺った。この集落は野迫川村の中でも幹線道路から入ったところに位置し、人口減少、高齢化が特に進んでいる。その状況を伺った。また、閉校した池津川小学校、区長さんのご自宅を見学した。

2. ワークショップの概要

11 月 22 日(火)

■ ワークショップ

11 月 19、20 日の野迫川村でのフィールドワークで学んだことを踏まえ、大学で 11 月 22 日にワークショップを行なった。議題は、①野迫川村の良いところ、②野迫川村で改善した方がいいと思う点、③学生が野迫川村で貢献できると思うことの 3 点である。

これら 3 点について、学生が 6 班に分かれてグループディスカッションを行った。班内で話し合った結果を授業の最後でプレゼンし、各々の考えを全体で共有することで、野迫川村に対しての考えをさらに深めた。

3. 参加した学生の感想(抜粋)

■ 住環境学科 2 回生

①野迫川村で良いところ

都市に住んでいるとほとんど触れることのできない大自然に圧倒するというか、心を打たれる感覚を野迫川村を訪れることで久しぶりに経験した。奈良市内も緑が多いところだとは思いますが、野迫川村の厳しくも美しい自然の風景には心を洗われるような、なんとも言えない感動を覚えた。夜の静けさや川の音など、都市の喧騒の中で暮らしていると聞こえない自然の音を野迫川村では聞くことができた。ほっと一息つき、そばで自然を感じるができるのが野迫川村の良い点だと思う。

アマゴの養殖など、この土地の特色もみられるのも良いと感じた。実際にアマゴの養殖を見学し、アマゴを卵から成体にするまでこんなに手間と時間をかけて養殖していたのを知ったとともに、災害で被害をうけても今まで手をかけて続けているのに驚いた。

奈良女子大の狩猟サークルが野迫川村で活動をおこなっているのを知り、そのような学生への地域の伝承や若い世代との交流があるのも長所だと思う。また、話や案内をしてくださった村の人々が親切であたたかいのも印象的でよかったと感じた。

②野迫川村で改善した方がいいところ

ワークショップを通して野迫川村がよりよくなる改善点の様々な意見が出た。クマが出る、交通の便が悪い、少子高齢化などが主にあげられた。

猟友会の人のお話にもあったように、人口林の割合が高く広葉樹が少ないのでクマの餌がなく人間が住む場所にクマが出没するようになったのが問題となっている。前の世代の人が植樹をおこなったことが年月を経て裏目に出たらしく、クマにとっても人間にとっても深刻な問題ですすぐには解決できないが、人間とクマの関係を考えるきっかけになったと思う。野迫川村に行く前はクマが出る村というイメージが一番強かった。クマの出没頻度が増えると、村の人の普段の生活が脅かされる。またクマが出るイメージが強くなると、訪れてみようと思う人もますます観光に来なくなってしまう。クマの問題の原因は深いところにあることを知り、すぐに改善することは難しいが取り組みが迫られているのを感じた。

少子高齢化の問題も改善への取り組みが必要だ。廃校になって使われなくなった校舎がそのままになっているのも改善すべきだと考えた。

③学生が貢献できること

このたび野迫川村を訪れ、様々な良い点の発見をするとともに、野迫川村の改善点も見えてきた。そして自分達学生が野迫川村の良いところや改善した方がいいところに学生として貢献できることを大きく二つ考えた。

一つ目は、学生が野迫川村の良い点・アピールポイントを県内に伝えるという貢献の仕方である。野迫川村を訪れて学んだことでもよい。学生ならではの自由な発想でできる活動があるのではないかと思う。例えば、野迫川村を訪問するツアーを企画し、観光で訪れる人が増えることで村に活気を与える取り組みや、いきなり大きな企画をしなくとも学内で野迫川村のPR ポスターなどを作り、学生同士で伝え合うことも野迫川村を知る人が増え関心を高めるのに重要だと考えた。

二つ目は、学生が大学で学んだことや持っている知識や新しい発想を村の改善や発展に活かしてもらおう貢献の仕方である。若い世代が少なくなると新しいアイデアが生まれづらくなると村

の人の話にもあった。廃校になった校舎が長年使われることのないまま建物だけ残っていたが、掃除・修理してきれいに使うことのできる状態にし、あらたな使い道を提案する取り組みも小さなことだが学生なりにできることだと思う。この建物の使い道としてはアートプロジェクトを導入してその展示場として利用する意見がでた。アートプロジェクトは地方再生の一つの方法として各地でもおこなわれているという話を近頃聞いたので興味深いアイデアだと考える。

このように、野迫川村の魅力を外に伝える取り組みや、野迫川村を訪れて村の人々と交流し、学びや発見を村や村の外で活かす取り組みが学生として無理なく有効に貢献できることだと考える。

■ 住環境学科 2 回生

①野迫川村の良いところ

野迫川村に行って感じた山村集落の良さで私が取り上げたいことは大きく分けて“自然、人”があります。まず、自然は山村だけあって豊かで景色が良く季節の移り変わりを感じられます。さらに、川の水が透き通り綺麗で空気も澄んでいて環境さえ整えば申し分ない自然環境です。自然環境の豊かさがもたらす安らぎや落ち着きは街中では得られない良さです。また、その自然が育む食べ物もおいしく奈良県でずっと暮らしていても知らない部分を知れました。次に、人は各集落やホテルなどで交流して誰もが距離が近く、柔らかい空気で接してくれたため初めて来た私でも気兼ねすることなく二日間を過ごせました。日々の生活の中では皆余裕が無く自分のことに必死な人が多

いからこそ、近頃あまり感じられない人の自然な温かさでした。

②野迫川村で改善した方がいいところ

街中の生活では得られない良いところがたくさんある村ですが、訪れる人、定住する人が少ないのが現状です。そのため自然の手入れも出来ず森が荒れ、自然動物との共生が難しくなっています。また、必要なものを手にいれるための店も無くなってしまいます。これらの原因として考えたのは“交通と産業”です。実際、私は奈良県でずっと暮らしていますが、吉野以南は電車も通っていないため気軽に行こうと思える場所ではないし、道も国道は整備されているが、国道を外れば細かったりカーブが多かったり、似たような道が続いたりと車で行くにもある程度の難易度があり、数えるほどしか南部には行きません。しかし、簡単に電車を通したり道の形状を変えたりすることもできません。となると、村、集落までのルートをわかりやすくするという部分を改善すべきだと考えます。実際、バスに乗っていても同じような道で一体どこに自分がかかりませんかでした。これはツアー以外の初めて訪れる人には大きな問題点だと思うからです。また、村民の安全のために集落へのルートを複数持てるようにし、万が一に孤立する可能性を下げるなど集落の安全性を高めることも人が集まるには必要だと考えます。

外部から人が来る環境になれば次は中身が必要です。林業が衰退した今、野迫川村には栄える産業がありません。働き口がないのです。ただでさえ奈良県は県外に働きに出る人が多く、野迫川から通勤できる範囲にも働き口はほとんどありません。和歌山方面にでても中心部から離れた場所なので同様です。そのため現地で何か林業に代わる産業を作ることが人を集めることに必要だと考えます。交通と産業が整い、人が増えれば環境面にも手が行き届き観光客を呼ぶことのできる村に近づけると思います。

③学生が貢献できること

私たちに出来ることのまず基本にあることは高齢化が進む村に若者の考えを伝えることです。その中でまず、若者が多く使う SNS で野迫川について“発信”し良さを知ってもらうことが一つです。次に、現地に来てもらうための“企画やアピールポイントについて現地の人に提案”します。そのために必要な施設のために民家のリノベーションなどの住環だからこそ関われる“環境整備への提案”をすることです。その後、実際に人に来てもらいその結果を踏まえ、さらに必要なことを現地の人と話し合い、自分も再発見した良さについて新たに“発信”します。発信、現地訪問、提案を繰り返し人が集まる村作りの手助けが出来るのではないかと思います。実際には、訪問中バスの中でもツアーについて話しをされていましたが、魅力的だと思うし行ってみたい人はたくさんいると思います。ですが、野迫川についてあまり知らず、関心が薄い人はそのようなツアーがあることを知らないと思います。こういう場面で若者たちが“発信”することが大きな意味があるのではと感じました。

後、若者はスマホを触ることが多いため電波が繋がらないことはマイナスかもしれないが、電子機器から離れて自然の中でゆっくりすることの魅力をかつて私は経験して感じています。若者にそのような体験をしてもらえるようなツアー内容を一緒に作るためにどのような内容だったらいかななどの“提案”ができると思います。“現地訪問”をして自分自身が現地のモノを食べ、使うことで現地の収入にもなります。特別大きなことはできなくても小さなことが村を変える一つの鍵になると思うので、住環だけでなく大学全体で村に関わっていただけるとと思います。

今回、初めて野迫川村を訪れましたが、思っていた以上に良い場所だと感じると同時に問題が深刻だとも感じました。これから少子化が進み日本で多くの集落が消滅すると言われていています。都会では得られない日本らしい良さをもつ集落をひとつでも多く残すことが日本という国を残すには必要だと思います。人間はせわしなく前に進むことに夢中になっていますが、私は今あるもので十分だと思います。今あるものを維持し生かしていけるような暮らしを提案して いけるようになりたいと豊かな自然や不便な中にもある温かさや魅力を通して感じました。

平成 28 年度・住環境学基礎実習

1. 授業の目的

平成 28 年度後期の住環境学基礎実習(中山担当)では、奈良女子大学野迫川村交流センターで「奈良女塾」に取り組んだ。この授業を受講している学生が現地の関係者と相談しながら進めることで、地域創生に寄与すると同時に、学生が山村地域の実情を学べるようにした。

2. 野迫川村「奈良女塾」の取り組み

(1)目的

野迫川村には、進学を考えている子どもたちのための学習塾がない。中には村外の遠く離れた塾に通っている子どももいるが、これには親の送り迎えが必須で、全ての子どもたちが通える訳ではない。また、村内には高校がないため、中学生は卒業後に村を離れる。そのため、小中学生には、彼らにとって身近な大人である高校生や大学生とふれあう機会がない。そこで、子どもたちの学習のサポート、大学生とのふれあい、またこれらを通して子どもたちが将来について考え

るきっかけになるようなプログラムを奈良女塾として計画した。平成 27 年 3 月に第一回を実施し、平成 28 年 8 月に第二回、平成 29 年 3 月に第三回を実施した。

(2)内容

奈良女塾の具体的な内容は、① 勉強、② パソコン教室、③ レクリエーション、④ 未来講座である。

①勉強

ワークを用いて各学年の総復習を行う。大学生がわからないところを個人的にフォローする。高校受験を控えた新中学 3 年生には、各自の苦手科目など柔軟に対応する。

②パソコン教室

Illustrator、PowerPoint、AutoCAD のソフトを用いて、パソコンを通じて自己表現やものづくりの楽しさを子どもたちに伝える。

③レクリエーション

スポーツやクッキングを通して、大学生を含め、学年を超えての交流を深める。普段は少人数でしか活動できない子どもたちに、大人数で取り組める機会を作る。

④未来講座

大学生が子どもたちに自らの経験を語り、将来の高校生活や大学生活、そして自分の未来を考えるきっかけになるようにする。

(3)参加者

塾の参加対象者は野迫川村小学校、中学校に在籍している児童、生徒である。

野迫川小学校・中学校の保護者の皆様へ

春休み野迫川奈良女塾のご案内

奈良女子大学

野迫川村の小中学生のみなさんを対象に、奈良女子大学の学生で春休みに塾を開催します。楽しいレクリエーションもありますので、ぜひご参加ください。

日時：平成 29 年 3 月 27 日～3 月 30 日（4 日間）
8:00～17:00（一部日程のみの参加も可能）

参加費 **無料**
（※お弁当の用意だけお願いします）

場所：旧野迫川中学校
対象：野迫川村の小中学生

内容

午前 ●学習
学年別のワークに取り組み、一年間の総復習ができるようにします。わからないところを大学生が教えます。

午後 ●パソコン教室
パソコンのソフトを使ってイラストを描いたり、キーボードの操作等を教えます。

●レクリエーション
みんなで楽しくスポーツやクッキングをします。

●未来講座
高校生活や大学生活はどんなものなのか、大学生が自分の経験をお話しし、子供たちに自分の未来を思い描いてもらいます

そのほか様々なメニューを検討中です。
詳しいスケジュールや申し込み方法は後日、改めてお知らせします。

多数のご参加お待ちしております。
連絡先：奈良女子大学 生活環境学部
E-mail : oaa_kurobe@cc.nara-wu.ac.jp

(2) 住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

平成 28 年度の住環境学基礎実習（室崎担当）では、昨年度に引き続き十津川村の谷瀬地区に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくりに取り組みました。十津川村には、自然豊かな観光資源や濃密なコミュニティなど、都市部では失われてしまった豊かさが多く残っています。

今年度は、このような十津川村の魅力を学生目線で発信するための方法の検討や情報収集を目的として現地での活動を行いました。初めて十津川村に訪問する学部生と一緒に谷瀬のつり橋や瀬峡、玉置神社などの主要な観光名所を見学し、今後より観光客が訪れるようになるための情報発信の内容・方法を考え、話し合いました。また、十津川村での暮らしを移住者目線で体験してもらい、率直な体験の感想を通して、今後の村づくりへの課題を学生目線から考えました。谷瀬地区の村づくり活動では、ゆっくり散歩道の看板を学生の意見を活かして改良案を考え、レーザー加工機を用いて新たな看板プレートづくりを行いました。

昨年度に引き続き、2 月には谷瀬地区で育てた酒米をつかった純米酒「谷瀬」の酒仕込みをお手伝いします。春には美味しい新酒が完成する予定です。

この授業の対象は学部 3 回生で、TA として修士の学生も参加しました。

■ 活動の日時・内容

10 月 9,10 日	・十津川村谷瀬地区にて、村の暮らし体験宿泊 ・十津川村魅力発見と情報発信に関する意見交換
10 月～3 月	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレートの製作
2 月 12～18 日 (予定)	・美吉野醸造で十津川村谷瀬地区の酒米をつかった純米酒「谷瀬」仕込み
3 月 27,28 日 (予定)	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板設置完成



谷瀬集落内散策



十津川村暮らし体験の様子

◇十津川村の暮らし体験宿泊を1泊2日で行いました。初日は、十津川村谷瀬地区での暮らし体験と集落内観光体験を、谷瀬地区に来る観光客や移住希望者の目線で行い、意見交換を行いました。暮らし体験では農作業を行い、集落内観光体験では、集落の主要観光地である谷瀬のつり橋や集落内の古民家“こやすば”に足を運び、その場所の魅力や人を呼び込むための課題を収集し、宿にて参加学生が集まり意見を出しあいました。

◇翌日は、十津川村全地域の観光活性化に向け、村の魅力発見と情報発信を目的として、村内に点在する観光資源を訪問して観光体験を行い、実際に観光客が足を運ぶためにはどうすればよいのか等を検討しました。

◇挙げられた意見・提案：十津川村の魅力は、豊かな自然環境もさることながら、「人」であることが挙げられました。だからこそ、情報発信の内容は、住んでいる「人」が持つ地域情報が良いという意見や、観光スポットの情報だけではなく、十津川村の豆知識など読んでいて楽しいと思える内容が掲載されたパンフレットやチラシがよいという意見、十津川村の主要観光名所は点在しているが、全部回ろうとしている人も多くみられたので、スタンプラリーなどを行ったらよいのでは、など多くのアイデアが生まれました。



参加学生の感想

十津川村での暮らしの体験は常に新たな発見があります。集落の方は訪れるたびに農作業の仕方やコツ、集落の伝統などを教えてください、これらは長年の経験や勘がなければ知りえないことで、インターネットで調べても出てきません。初めて十津川村を訪れた学生とともに意見交換をすることで、今以上に十津川村の魅力は「人」であることを再認識できました。だからこそ、あたたかな人のつながりがよくわかるような十津川の魅力発信をできるように努めたいと思いました。

初めての谷瀬、初めての宿泊で、分からないことだらけでしたが、いろんなことを知り、また楽しむことのできた二日間でした。谷瀬の方々、初めて訪れた私たちも笑顔で迎えてくれ、すごく嬉しかったです。自然溢れる山村の景色を見たり、十津川村の名産を知ったり、普段体験することのない畑仕事をしたり、とても勉強になりました。私たちが知り得た谷瀬の魅力やそこに

住まう人々の魅力を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいなと思いました。

■ 10月～3月 十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレート製作

◇十津川村谷瀬地区では、谷瀬の吊り橋から集落内をゆっくり歩いて山の上の展望台に至る「ゆっくり散歩道」を整備するなどの村づくり活動が住民主導で行われています。現在は昨年度のワークショップを元に、看板の改良に取り組んでいます。看板の大きさ、数、記載内容を学生で検討し、段ボールでモックアップをつくりながら検討を重ねました。看板の材料は十津川材を使用し、学生の手で製作することにしました。

◇大学で試作した看板モックアップを、集落の寄合に持って行き、集落の方の意見を聞きながら相談を重ねた結果、看板は2種類に作ることに決まりました。一つは、道しるべの役割をする看板で、十津川産の木材にレーザーカッターで直接案内の文字を印字することで長期で使えるものを目指しました。もう一つは、村の魅力を伝える手書きイラストの看板です。

◇附属中等教育学校の技術室にて木材へのレーザー加工を行い、3月末までに現地での設置を完了させる予定です。



看板作成の様子



木材へのレーザー加工の様子

参加学生の感想

ゆっくり散歩道沿いにある看板の位置や記載内容をひとつひとつ検討し直し、観光客が道に迷わず、より楽しく歩いてもらえる看板を目指しました。最初は全て木材にする予定でしたが、手描きの看板もあたたかみがあるから残したいという集落の方からの意見は、自分たちの手でゆっくり散歩道をつくることから始められた集落の方たちの思い入れが感じられました。

木材へのレーザー加工は想像以上に時間が手間や時間がかかり大変でしたが、これからも長期間そこに立ち続け、道案内をしてくれる良いものが完成しました。設置して集落の方やたくさんの観光客の方に見てもらおうのが楽しみです。

ゆっくり散歩道の案内看板を作り直しました。観光客の方からも多く見られる散歩道の看板を作ると聞き、集落の顔の一部を任せてもらえることに驚きました。最初は不安もありましたが、

どんな看板だったら見やすいだろう、村の魅力が伝わるだろうと考えるのはとても楽しい時間でした。

十津川の杉材と私たちのデザインが合わせ、可愛く実用的な仕上がりになったと思います。お披露目する日が楽しみです。

(3) 中山間地域における活動報告

2016年5月14日、私は『パサージュ 20A：下市町へ移行』授業のTAとして、下市町への巡検を行った。以下では、主に現地での交流活動の内容と実践状況を紹介する。

下市町は、奈良県の南半分を占める吉野郡の北西に位置し、吉野川（和歌山県では紀ノ川）の南側で、里山の魅力に出会える町である。大きく分けると山岳地帯と丘陵地帯になる。月ヶ瀬梅林、賀名生梅林と並ぶ奈良県三大梅林のひとつ、広橋梅林がここにあった。参加者は事前準備を怠らず、参考文献を読む上で、先生から配布された地形図に下市町の町界をうつし、果樹林などの土地利用を色で塗り分けていた。

巡検当日は近鉄電車で下市口駅まで移動、その後バスに乗り、時間がかかったものの、天候にも恵まれ、最高の巡検日和となった。一日目は、下市町役場地域づくり推進課の方から、町の地域おこし情報や、割り箸産業について紹介していただいた。人と経済のつながり、地元産業、観光と移住の問題など、短時間ではあったが幅広く状況がわかった。割り箸発祥の地として名高い下市町は、今、建割り箸職人の高齢化が進んでいる。参加者は作業現場を見学しながら、職人たちから聞き取り調査を行った。

夜の宿泊は、1999年に廃校になった旧広橋小学校をリフォームしたコミュニティー施設、「よしの広橋スマイルヴィレッジ」であった。学生たちは、当日の色々な見聞を整理したり、交流したり、翌日の自然観察巡検の準備を行った。

二日目は、中央構造線断層帯や果樹林などの見学・観察を行った。教室での学習とは違い、まわりの景色を見て、現地の土地を歩き、先生から変動地形や地質などの説明を受けた。特に、旧吉野川が堆積させた礫層と下市町の土地利用との関係が、より深く理解できたと思う。



写真左：下市町の割り箸工場 写真右：中央構造線断層帯破碎帯付近の堆積岩

巡検に行く前はどれも同じような山にしか見えなくても、帰りにはヒノキとスギの区別や果樹林の特徴がわかるようになった。疲れたが、この充実した2日間は、学生たちには、かなり貴重な体験になったことと思う。

(4) 地域コミュニティにおける活動報告

下市町での活動報告農林塾に参加する都市住民の意識とその背景

◇授業の概要

平成 28 年度文学部専門科目 (COC+科目)「コミュニティ・リサーチ」の授業は、奈良県下市町の協力を得て、下記の 4 回実施された。

- 第 1 回 (4/16) 講義：地域社会の諸問題、地域参加型アクション・リサーチ「らくらく農法」の紹介、参加型地域社会調査法の概要 (買い物マップ・支え合いマップ・ムラ資源点検・フォーカスグループインタビュー)
- 第 2 回 (5/22) 現地実習：(午前) 巡検 (柝原区柿間引き体験、直売所「道しるべ」見学、講義)、(午後) グループ別調査
【A 班】中山間地域高齢女性グループ・インタビュー (西山区)
【B 班】巡検 (西山区、丹生区、広橋区)
- 第 3 回 (6/11) 現地実習：(午前) 巡検 (平原区ピザづくり体験)、(午後) グループ別フィールドワーク
- 第 4 回 (7/16) 現地活動：奈良女子大学下市アクティビティセンター開所式、下市町奈良女子大学連携公開講座「地域の将来を考えるために」参加、当センターでの今後の活動についてディスカッション

ここでは、第 3 回午後に行われたグループ別フィールドワークのうち、筆者が参加した農林塾インタビューの結果を報告する。

◇インタビュー調査の概要



本調査は、農林業に関心を持つ都市住民の意識とその背景を明らかにするために行ったものである。2016 年 6 月 11 日土曜日、下市町小路地区において開催されている農林塾の現場に伺い、インタビュー調査を実施した。インタビューの対象者は、農林塾の発起人で下市町の地域おこし協力隊員でもある秋谷奈美氏および農林塾参加者であり、質問の形式としては半構造化面接を用いた。対象者に関しての事前情報がほとんどなかったことを踏まえ、質問項目は適宜変更・追加している。ただ、参加者に対してのインタビューの内容は、どの対象者の場合でも、この農林塾に参加するに至った経緯や理由、下市について感じる点、今後やっていきたいことが主である。なお、対象者一人一人の状況を丁寧に読み取る目的と、プライバシー保護の観点から、質問者 3 名に対し、インタビュー対象者 1 名という個人面接の形をとり、他の参加者とは少し離れた場所でインタビューを行った。インタビューは質問者が用意した質問にある程度答えてもらった上で、話題がおおよそ出尽くした頃を目安に終了したが、インタビュー時間は概

ね 15 分程度である。インタビュー対象者には、授業レポートとして公表することについて、インタビュー時に了承を得た。

また、今回は、時間に限りがあったことと、秋谷氏と参加者の皆さんのご厚意で突然のインタビューを快諾してくださったという背景から、インタビューの手法の厳格性よりも、質問者と対象者のコミュニケーションを重視して、聞き取りしている傾向があることを注記しておきたい。そのため、インタビュー対象者の年齢や職業など基礎的な個人情報については、対象者が自ら話した場合を除いては無理に聞くことはしておらず、正確な情報としては不十分などところがある。

◇農林塾の様子について：秋谷氏へのインタビューと見学を通して



参加者にインタビューするにあたり、この農林塾の情報や活動の様子について知っておくため、活動の一部を見学させていただくとともに、発起人の秋谷氏からお話を伺った。ここでは、そこからわかったことをまとめておきたい。

まず、この農林塾は月二回（第二・第四土曜日）開講しており、受講料は一回につき 8000 円である。対象者は町外・県外の都市部の就業者を想定しているため、仕事や家庭に負担の少ない週末月二回としているそうである。また、一回につき 8000 円という受講費は秋谷氏も「決して安くはない」と話すが、無料型の農業体験にしてしまうと途中から参加しない人が出てきたり、あまり真剣でない参加者も集まってしまうため、この少し高めの料金設定にすることで、真剣に農業について学びたいという参加者のみを集め、活動の質を上げているそうである。実際、活動の様子を見ていても、見るからに「農家」というような様子ではない参加者たちが真剣なまなざしで講師の説明を聞き、時にはかなり踏み込んだ栽培方法についての質問も積極的に行っていた。秋谷氏によると参加者の多くは普段は神戸や大阪、京都など町外・県外でサラリーマンや OL として働いている人がほとんどで、年齢層としては 40 代から 50 代までの人が多いという。女性の参加者よりは男性の参加者の方が多いということであるが、どの人も「ある程度経験を積み、社会を知る中で人生に何が必要かわかってきて農業に行きついた」という点で共通しているという。けれども、すぐに農家になろうというわけではなく、従来の仕事を継続しつつ、家庭の状況を踏まえながら、少しずつ農業の知識を身に付けようとしている人がほとんどだということ、仕事や家庭の事情で欠席した場合でも学習を続けられるように、毎回の活動はビデオで記録し、後で視聴できるようにしているということだった。

また、この農林塾を開設するにあたり、地元住民の理解と協力が必要不可欠であったことについてもお話があった。農林塾が行われている土地や利用する水は地元の人に借りているようで、トイレに関しても近所で借りるということだった。このように農林塾の開催場所は民家に囲まれた集落内にあり、参加者は地元住民以外であるので、参加者の声や視線が地元住民の生活の支障にならないように寒冷紗を周りにめぐらせてブラインド代わりにするなどの配慮も行っていると

いう。秋谷氏によると、農林塾開設から1年半かけて地元の人々の信頼を得て、みんなでここまでやってきたということだった。家一軒分以上はあると思われる畑では、ナスやトウモロコシ、スイカ、トマト、レタス、カボチャ、オクラ、サツマイモ、ジャガイモ、ニンニク、イチゴといった様々な季節の野菜や果物が栽培されており、参加者（この日は10名弱）、秋谷氏、講師が時には冗談を言って笑い合いながら、和気あいあいとした雰囲気、けれども汗を垂らしながら真剣に農業について学んでいたのが印象的だった。

◇農林塾参加者へのインタビュー

農林塾でのインタビュー調査を行う班では、秋谷氏からの説明と見学の後、二つのチームに分かれてそれぞれ調査を行った。筆者らのチームでは、3名（男性1名、女性2名）の参加者にインタビューを行った。

まず、一人目は、4、50代の男性で、普段は県外でサラリーマンとして働いているという。この方も、ある程度都市部で働いて社会のことがわかってくると農業がしたくなかったために、この農林塾に通い始めたという。通うには決して近い場所ではないが、週末に近くでやっている場所はないため、ここにしたいという。子どもがまだ成人しておらず、土地もないため、すぐ移住というわけにはいかないが、かなり本気で移住して農業をすることを考えているということだった。話の内容以外から読み取れたこととしては、とてもイキイキとした表情で話してくださったこと、社会人としてある程度経験を積んだ者として、筆者らにアドバイスをくれるような感じで話してくださったことなどがある。インタビュー一人目での男性には立ち話という感じでお話を聞いてしまったため、後の2名ほど十分にお話を聞くことができなかつたのが悔やまれるが、様々な経験をしてきて、たくさんのことを考えてきたからこそ、農業と真剣に向き合っているということとはよくわかった。

次に、お話を伺ったのは、30代の女性である。この女性は兵庫県西宮市在住でふだんは会社員をされており、JRを2時間半ほど乗り継いでここまで来ているという。通ってくるのは確かに大変だが、有機農法や林業に関心があるため、そういったものを含めトータル的に学ぶことができる点が決め手となってこの農林塾を選んだそうである。西宮市付近でも農業体験の場はあるがなかなか林業までやってくれるところはないということだった。この農林塾を知ったきっかけは、JRの駅に置いてある『奈良』という無料の広報パンフレットで、もともと奈良が好きのために刊行ごとにこのパンフレットは手に取っていたが、偶然その中でこの農林塾の小さな広告を見つけ、是非参加してみたいと思って問い合わせたとのことだった。参加し始めたのは一期の終盤であったため、この4月から二期生として一から学び始めているところである。

この女性は農業に興味を持つまで、両親が野菜を（家庭菜園のような形で）栽培していても専ら食べるばかりで、何か育てようとしてもすぐに枯らしてしまう状態だったという。「自分には作るの無理なんだ」と諦めかけていたが、ある程度年齢を経てきて、また社会の動きから、「やっぱり循環社会なんだ」と思い至り、農業に関心を抱いたようだ。また、以前からやってみたくて思いながら学業や仕事のために挑戦できなかった織物を趣味として始めることができ、その後草木染にも関心が広がった。この草木染は無駄が出ない、まさに循環型の作業であり、この織物の趣味を通して改めて農業への関心が強くなったという。ただ、この時点では「畑をすれば農業や

ってるんだ」と思っていたが、この農林塾に来てみて、どうやらそれは「違うんだ」と気づいたそうである。それはどういうことかという、農業とは畑だけではなく、雨や山とのつながり、さらには生き物とも関わっているということに気づいたということである。そして、現在はいきなり兼業農家ということは考えていないが、とりあえず自分が食べるものは一部でも自分で作れるようになりたいと思っているそうである。仕事が忙しくてコンビニの食事になることや、今後の健康に危機感を持つようになり、食への興味が出てきたのと、社会でもそのような環境や自然を見直す風潮が出てきていることが影響したと話されていた。この方にとって、農林塾は仕事とは視点の異なる活動であるだけでなく、「ある種の緊張感」があるものだと話していた。それは食べ物を作るからというのと、きちんと育てるためには毎日状態を確認しなければならないからである。今はこの農林塾で学んだことを活かしつつ、自宅のベランダのプランターでオクラ、大和真菜、紐唐辛子、ゴーヤ、ナーベラ（沖縄の野菜）、紫蘇などを育てているそうである。大和野菜に関心がある彼女は後々奈良で大和野菜を育てて、京野菜に比べるとマイナーな大和野菜や奈良をもっと広めていくのが夢であると話してくださった。尚、奈良が好きなのはもともと奈良出身であるためであり、故郷についてもっと知りたいという気持ちがあるからでもある。また、下市については、電車で下市に来ると開けた感じで、畑も山も川もあって自然の宝庫で、ありがたい、気持ちのいい場所だと表現されていた。さらに、吉野地域の歴史についても触れ、出身地である奈良市との違いを感じ、憧れがあるということだった。ただ、そうした魅力ある下市に後々住めたらいいという気持ちもあるものの、専業農家ではなく仕事と両立するのが理想であり、そこをどのように折り合いをつけていくかが問題だと考えているようだった。最後に、今期の目標として有機や自然農法、林業とのつながりについて広く学んでいきたいと教えてくださった。この女性も終始とてもイキイキと自分の思いや夢について語ってくれ、インタビューの終盤には質問者にも野菜を育てた経験はないかなど尋ねる熱心さで、真剣に農業と今後の人生の過ごし方を考えていることを強く感じた。

最後、三人目の女性は20代の女性で、他の参加者との関係性を見ても、最も若い参加者のように思われた。この女性は普段は事務職をされており、京都から近鉄で2時間ほどかけて下市まで来ているようで、やはり先ほどの女性同様、遠いと感じている様子だった。この農林塾に参加するまでの経緯については、この方はもともと山や自然が好きで山登りをしていたのだが、それが広がって兵庫県で畑のボランティアをしていた。けれども、ボランティアだと求められた作業をして部分的に関わるだけであり、体系的に理論を学ぶという形ではなかったため、もう少し学びたいと思っていた。そのような中で、そのボランティア先で知り合った鳥取の梨農家の手伝いもするようになり、果樹を育てることの楽しさを知った。そこで、果樹の栽培について詳しく知りたくなり、柿と梅の栽培について学ぶことができるこの農林塾に参加することを決めたという。今後は、まだはっきりとしたビジョンはないし、様々な体験を経る中で価値観が変わってくることもあるだろうが、とりあえずは「最初からこれをやらなくちゃ」と決めるのではなく、やりたいことには挑戦し、桃やブドウなど他の果物についても学んでみたいと考えているそうである。尚、果樹栽培に惹かれた理由の一つは、腰を曲げずに上を向いて作業をすることが多い点で、その背景には過去にジャガイモの栽培をしたときの土寄せの作業が腰を曲げて大変だったという経験があるそうである。質問者側から、下市の柿農家が後継者不足や高齢化で困っているというこ

とを話すと、「年齢が上がると大変になるのかな」と少し不安も感じている様子だった。

農林塾には5月から参加されているということだが、農林塾との出会いは1月に大阪で開催された農業フェアで、そこで今後の農業との関わり方について相談したところ、この農林塾を紹介されたのだそうである。その背景には、果樹は収穫できるようになるまで時間がかかることと、土地はあってもなかなか資金がないということで、京都では果樹というと丹波のブドウくらいしかないという問題があったそうである。このように果樹栽培は野菜以上に困難が多いため、正直なところ、現在でも果樹栽培で独立就農したいかという迷いがあるという。資金面や計画性の問題を考えると起業くらいの覚悟が必要なことであり、今後もし果樹栽培に関わっていきたいという気持ちはあるものの、それがプライベートなのか、仕事なのかという点ではまだ考えあぐねているという複雑な心情を話してくださった。

下市の印象については、意外なことに「人が多い」という返答をもらった。それはなぜかというと、この方がボランティアに行かれている兵庫や鳥取と比べると、まだ下市は駅からも近く、民家も密集しているので、都会ではないが比較的集落としてまとまっているので、そう感じるということだった。また、鳥取の場合は、京都から片道3時間から4時間ほどかかるということで、現地での活動を考えると二泊三日でないと行けず、日帰りできるという点でも下市はまだ良いということだった。

この方は様々な場所で農業に関わっているようで、篠山でも他のボランティアと交流したり、時には神戸大学の学生とも関わったりすることもあるという。最後に価値観の変化について具体的にはどのような例があるか、もう少し踏み込んで質問したところ、フルーツは嗜好品なので、農業をやる人でフルーツをやりたいと思っている人は少ないのではないかと最初は思っていたが、やる側になってみると農業は毎日やることがあるので、需要があるかというよりも(その作物が)自分に合うかというマッチングを考えて、作物を選ぶようになったということも挙げられた。さらに、この作物選びに関しては、他にも、「やりたいから」ではなく、生計のためにはこの作物を育てなければならないという人もいたり、これ失敗したから次はこれといろいろな作物に挑戦する人など、ただ食べる側にいるだけではわからなかった様々な決め方があることを知り、考えの幅が広がったように感じるということだった。他にも、農業に関わる前までは何とも思わなかったジャムや丹波の黒豆の煮物、コンビニのカットフルーツなどについて、外見に傷があるものでも加工することによって、無駄なく利用したものであることを知り、「上手いな」と感じたことなどを教えてくださった。この方は、若い頃から農業に関心があり、実際にかなり積極的に行動を起こされているということもあり、お話からは農業に関するボランティアやフェアなど様々な取り組みが各地で行われていることがわかった。その一方で、果樹栽培という農業の中でも比較的難易度の高い分野に関心があることによる困難についても知ることができた。インタビューの様子からはまだ迷いのある複雑な心情も垣間見えたが、穏やかな口調からは念願の果樹栽培について学ぶ機会が得られたことの充実感や果樹への強い意志が伝わってきた。

◇考察

今回は、この小路地区の農林塾について大まかに知ることと3名の参加者へインタビューを行うことしかできなかったが、それぞれ様々な経験や考えを経たことで遥々遠方の都市部からこの

農林塾に集まってきたことがわかった。そして、秋谷氏が望んだように、どの人も真剣に農業について学ぼうとしている様子で、インタビューをした3名を含め、今後も農業に関わっていきたいという人がほとんどであるということが読み取れた。ただ、そうした農業や自然への憧れや意欲を強く抱いている一方で、現在の仕事を完全に辞め、田舎へ移住して農家となるには、少なからず抵抗感があるようである。その背景には、農業の経済的な難しさや土地の確保の問題、さらに家族の生活など現実的な問題があることに加え、「農業は経済的あるいは肉体的に厳しい」という認識に起因する心理面での不安があるのではないかと考える。確かに社会では昨今、有機野菜が人気になったり、農業体験の機会が増えたりして農業への再注目や自然の再評価という風潮があるが、農業に関連する現実的な課題が解決していない以上、なかなか就農にはつながり得ないという厳しい現実があることがインタビューからも読み取れた。

また、参加者たちのように人生やこれまでの生活を見つめ直した結果、農業に関心を抱き行動を起こそうとしても、電車で2~3時間行かなければ十分に学べる場所がないという現状はやはり問題である。さらに、この小路地区の農林塾の成功に関しては秋谷氏の存在が大きいと考える。上記のとおり、小路地区の地域住民への配慮や参加者へのきめ細やかな対応があったからこそ、農林塾をすることが可能になったのだし、地元の広報誌や都市部での農業フェアを活用したPR方法の有効性も忘れてはならない。こうしたことはなかなか過疎化・高齢化が進む地域の住民や自治体だけでは実現できないと考える。活動風景を見ていると、おそらく地元農家の方だと思われる講師と都市部からやってきた働き盛りの参加者たちの間に秋谷氏が立って上手く関係を築くきっかけを作っているように見えた。秋谷氏の人間的魅力が成し得ていることも多いだろうが、地域おこし協力隊の人と人をつなぐという役割はやはり極めて重要であると考えられる。

今回は農業や地域活性化について重要な結論が出せるほどの調査はできなかったが、農林塾の見学と3名の参加者へのインタビューは農業が抱える現実的な難しさとその打開策は何かを考える上で非常に参考になった。そして、コミュニティ・リサーチの観点からは、地域おこし協力隊を地域活性化のキーパーソンとしてとらえ、彼ら・彼女らが加わることで、地域やそのコミュニティにどのような変化が起き、どのような成果を招くのか、今後さらに詳しく見ていきたいと考えている。





(5) 歴史学実習における活動報告

■歴史学実習概要

歴史学実習（文学部専門教育科目）は、人文社会学科歴史学コースが提供する授業である。従来は、奈良近辺で日帰りフィールドワークを2回行い、さらに受講生の希望による2泊3日の遠方地フィールドワーク（博多・長崎・鹿児島など）を実施して、年度末に受講生が手分けして報告書を仕上げ、という内容だった。また、各フィールドワークでは、あらかじめ受講生が現地説明のための資料を分担作成し、現地では参加者全員がそのコピー集を持ちながら歩き回り、受講生が現地説明をしていく、というやり方をとっている。

COC+事業の開始に伴い、小路田泰直副学長の求めに応じて、フィールドワーク対象地を奈良県及び紀伊半島を中心とする太平洋沿岸に絞り込んだ歴史学実習を実施している。昨年度の実習は2泊3日で十津川村と熊野のフィールドワークを行ったが、今年度は2泊3日で紀伊半島を一周するコースを辿った。

■事前準備

教員側がコースを設定して、受講生8名が以下の項目の資料を分担作成して、A4両面印刷27枚の資料集を作成した。

■資料集項目

鬮鶏神社、熊野水軍、三段壁洞窟、潮岬、トルコ軍艦遭難慰霊碑、熊野三山、補陀洛山寺、熊野詣、熊野古道、熊野灘、熊野の神話、神武東征伝説、花の窟神社、尾鷲神社、天狗倉山と修験道、志摩国、伊雑宮、伊勢神宮、お伊勢参り、御塩殿神社、松坂

■行程表と参加者

行程表

<p>16日(水) 9:00近鉄奈良駅出発 田辺市鬮鶏神社 白浜町三段壁洞窟 串本町潮岬 紀伊大島 トルコ軍艦遭難慰霊碑 17:00那智勝浦町到着</p>	<p>17日(木) 9:00出発 那智勝浦町補陀洛山寺 熊野那智大社 新宮市熊野速玉大社 熊野市花の窟神社、大泊 尾鷲市尾鷲神社 17:00志摩市到着</p>	<p>18日(金) 9:00出発 志摩市磯部町伊雑宮 伊勢市二見町御塩殿 伊勢神宮 松坂市本居宣長ノ宮 （計画するも見送り） 17:00奈良市到着</p>
---	---	---

参加者（計17名）



上段左より那智大社、
御塩殿神社、伊勢神宮
下段左より
潮岬神社、伊雑宮



■歴史学実習体験報告

2016年度の歴史学実習は和歌山・三重の沿岸の史跡を巡り「黒潮の道」を実感するもので、熊野水軍の伝説が残る闘鶏神社、三段壁洞窟にはじまり、トルコ軍艦遭難の地や、花の窟神社、大泊など、さまざまな史跡から太平洋を眺め、存分に潮風を浴びる3日間だった。



実習は事前調査、訪問、事後調査の流れで行われた。実際に現地を訪ね、歩き、見ていくなかで事前に関心を持っていた場所とは違う箇所に興味を移したのか、事前学習の担当箇所とは全く違うテーマで事後レポートを仕上げる者も多く、文献を読むだけでは得られない興味・関心というのが実地において初めて花開くこともあるのだと思われた。私の場合は、沿岸部ということで事前学習の折より漠然と、地震による津波の影響が気にかかっていたのだが、現地を移動するなかでその気がかりが明確なものへと変わっていった。

今回の実習で我々が通った和歌山県田辺市から三重県伊勢市にかけての沿岸部は東南海地震に



おける津波の被害地域である。しかし、私たちは移動中のバスの車窓からも、ホテルの部屋の窓からも海を眺めることが可能であった。もし今、東南海地震が起これば、そこには必ず津波が押し寄せるのにも関わらず、人々はそこで津波のことなど気にもとめず生活している。人だけならば緊急時のみ避難することも考えられ

るが、どうして避難させられない神仏までも津波に流されかねないその地へすえてしまうのはどういうわけなのか。このような思いのもと、奈良に戻ってから疑問を解消するべく史料にあたった。

日頃、この奈良盆地のなかで暮らしていると考えることの少ない海を巡る様々なことが、3日間の実習のなかでは思考の中心となっていたのを感じる。海は外界との隔たりではなく、開けた「道」なのだという先生方の認識も、海を間近にしてはじめて腑に落ちたような気がした。それでも私の関心が「海の道」よりは津波の方へと向かっていったように、同じ場所を訪れても感じ取ることというのは皆違っていたに違いない。実際に紀伊半島を巡った3日間だけでなく、事前

事後学習を含め、この実習で得られたものは、今後、それぞれが研究を進めていくうえで生きてくるだろう。

■歴史学実習体験報告

歴史学コースでは、2016年11月16日から18日にかけて、和歌山県、三重県の海岸沿いの地域を中心にフィールドワークを行った。紀伊半島といえば、修験道の修業が行われるような山がちな地形や、黒潮のような早い潮流といった厳しい地理的条件が思い起こされるであろう。このことが自然豊かで神秘的な印象をもたらす一方で、同時に過疎の一因ともなっている。実際に、今回の実習での史蹟から史蹟へのバス移動も、長時間に及ぶものであった。このような点から紀伊半島は交通の発展から取り残されてきたように見える。

こうした状況の中、どのようにして紀伊半島に人を呼び込み活性化させていくかという問題について、紀伊半島の歴史の中にその解決の糸口を見つけることができる。例えば今回の実習で訪れた熊野市大泊は、鹿児島県坊津に匹敵する規模をもつ湾港であり、長く語り継がれたその名前が示すように交通の要衝であったと考えられる。また熊野灘は早い潮が流れる交通の難所であるというイメージが強いが、実習で目にした熊野灘は、天候に恵まれたこともあるだろうが非常に穏やかな風いだ海であったことに驚かされた。こうした点は文献からのみでは判別できないことであり、実際に目にすることによって初めて間違っていた認識を正すことができる。また紀伊半島には伊勢神宮や熊野三山などの有名な寺社が存在するが、それだけではなく現代人にとって交通の不便なように思われる地域にも、大きな寺社が数多く建立され現代まで守り継がれている。例えば花の窟神社や尾鷲神社などである。また補陀洛山寺の裏山では、中世から近世に溯ると推定される石塔を見ることができる。このことは、それらの寺社が歴史上重要な地位を占めていたこと、そしてそうした有力な寺社の繁栄を受け入れる基盤を紀伊半島が保持していたことを示している。

こうした点が今回の実習によって明らかになり、歴史における紀伊半島は、現代におけるイメージとは逆に、交通の要衝であり非常に繁栄した地域だったと結論づけることができる。我々が、紀伊半島を交通の不便な地だと考えてしまうのは、近代以降の鉄道の開発が平野部のように容易



に進まなかったことが大きく影響しているだろう。すなわち、近代以降に構築された熊野像を前近代にまでさかのぼって当てはめてしまっているのである。まずはこのような先入観を払拭する必要があるだろう。

我々のさらなる課題は、交通の要衝であった前近代の熊野と、交通の発展に取り残された近代の熊野とをいかに結びつけるかということである。すなわち前近代においてなぜ紀伊半島は発展しえたのかを探究し、そしてそ

こに現代において紀伊半島を活性化させてゆくためのヒントを見つけねばならない。いうまでもなく紀伊半島の史蹟は、観光資源として高い価値を持っている。しかしそれらの史蹟を、現代と無関係な過去のものと見なすだけでは、紀伊半島のもつ可能性を十分に活かしたものとは言えな

いだろう。紀伊半島の史蹟が示す歴史上の繁栄と、現代における課題とのギャップを埋める、比較史的視座に基づいた建設的議論こそが、紀伊半島の活性化に不可欠と思われる。

② 就職(企業との関わり)について

1. 学生向け意識調査の実施

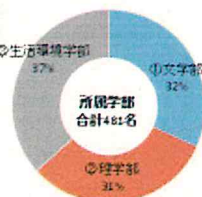
やまと共創郷育センターにおいて、平成29年2月に1回生を対象に、「奈良県内で就職することに対する意識調査」を行い、学生の奈良県での就職に関する意識の実態を把握することに努めました。意識結果については以下の通りです。

奈良県内で就職することに対する意識調査(学部学生対象)

平成29年2月アンケート調査結果

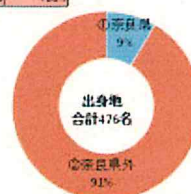
1 あなたの所属学部と出身地を教えてください。

学部	人数	割合
①文学部	153	32%
②理学部	152	31%
③生活環境学部	176	37%
合計	481	100%



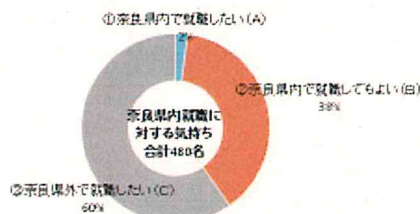
1 出身地 (*無回答5名)

出身地	人数	割合
①奈良県	41	9%
②奈良県外	425	91%
合計	476	100%



4 奈良県内で就職することに対して、以下の選択肢の中からご自身の気持ちに一番近い選択肢を選んでください。(*無回答1名)

気持ち	人数	割合1	割合2
①奈良県内で就職したい(A)	10	2%	40%
②奈良県内で就職してもよい(B)	183	38%	
③奈良県外で就職したい(C)	287	60%	60%
合計	480	100%	100%



県外で就職したいという学生の理由(抜粋)

- ・ 地元に戻って就職したい。
- ・ 奈良県でしたいと思う職がなさそうなのと、したい職が東京などにありそうだから。
- ・ 地元に戻って、地域の地域振興に貢献したいから。
- ・ 最低賃金が低い、交通手段が少ないから。
- ・ 住みには良いが働き続けたいとは正直思わない。
- ・ 県外の方が大手企業が多く、視野が広がるから。
- ・ 奈良にいる必要性を感じない。奈良じゃなくても良い。
- ・ 奈良での就職について全く知らない。
- ・ 奈良県内に私になりたい職業で働ける場所をしらないため。
- ・ 奈良は田舎だから、東京か大阪に行きたい。
- ・ 奈良県に魅力的な企業がないから。
- ・ 自分のつきたい職業がなさそう。